

「平成 28 年度 第 1 回高知県総合教育会議」

開催日 平成 28 年 9 月 23 日（金）13：00～15：45

場所 高知会館 「飛鳥」

（司会）

定刻となりましたので、ただいまから平成 28 年度第 1 回高知県総合教育会議を開会いたします。

私は議事進行を担当いたします県総務部長の梶と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、今年度最初の総合教育会議となりますので、ご出席の皆様をお手元の名簿順にご紹介をさせていただきます。2 枚目に名簿があらうかと思えます。

まず、尾崎正直高知県知事です。

（尾崎知事）

どうぞよろしくお願いいたします。

（司会）

田村壮児教育長です。

（田村教育長）

よろしくお願いいたします。

（司会）

久松朋水教育委員は、少し遅れるとのことでございます。

竹島晶代教育委員です。

（竹島委員）

よろしくお願いいたします。

（司会）

八田章光教育委員です。

（八田委員）

よろしくお願いいたします。

(司会)

中橋紅美教育委員です。

(中橋委員)

よろしくお願いします。

(司会)

平田健一教育委員です。

(平田委員)

よろしくお願いします。

(司会)

それでは開会に当たりまして、尾崎知事からご挨拶を申し上げます。

(尾崎知事)

第1回の総合教育会議、その開催に当たりまして一言ご挨拶を申し上げます。

本日は大変ご多忙の中、教育委員の先生方皆様、また関係者の皆さん、ご出席をいただいております。本当に感謝を申し上げます。ありがとうございます。

総合教育会議も、昨年徹底した議論を行わせていただいて、そしてこの教育大綱という形でその議論の成果を取りまとめ、この28年度はその実行元年ということでもあります。この教育大綱について、まずは、しっかりと実行していくということが極めて大事。言うまでもないことではありますが、絵に描いた餅にするわけには当然いかないのでありまして、この教育大綱をしっかりと実行していくということが極めて大事だろうと、そのように思います。

PDCAサイクルをしっかりと回して行って、この教育大綱がしっかりと実行されているかどうかを確認をしていくということが、まず本日の第一の主眼と、そういうことであろうかなと、そのように思います。

また、実際実行していくに当たりまして、していくと、やはりどうも所期の目的を達せそうにないなとか、どうもこの施策については見直しが必要ではないかとか、更に言えば非常にうまくいっているのもっともっと伸ばしていけるんじゃないかとか、いろんなことが考えられてこようと、そのように思います。

その実行段階におきますその取組、しっかりとこれをいわゆる次のアクションにつなげていく、大綱の見直しということにつなげていくということも、また非常に大事ではないのかなと、そのように考えております。

是非この総合教育会議において、しっかりとその点、このPDCAサイクルを回し、次の更な

る改善につなげていくということについて、しっかり皆様とお話をさせていただきながら取り組むことができればと、そのように考えております。またよろしくお願ひ申し上げます。

また後で、それぞれ事務方からもお話があらうかと思ひますけれども、私ども一定把握している範囲において、例えば全国学力テスト、まだ結果の発表はされていませんが、この4月に行われましたもののいわゆる自己採点の結果によれば、やはり少しいい方向に向かいつつある、その兆しも見えてきているのではないかと、そのように思ひます。

また、実際学校現場においても、様々な新しいチャレンジが行われてきているのではと、そういう感じがいたしているところがございます。

是非この大綱に沿っていわゆる「チーム学校」の取組を進める、厳しい環境にある子供たちへの対策を進める、さらに地域と協働して取組を進めていくなど、これらの柱に基づいて、しっかりとした教育の更なる振興につなげていくことができらばと思ひ次第です。是非ここで、そのためにもPDCAサイクルをしっかりと回すことが大事と思ひます。どうぞよろしくお願ひを申し上げます。

それでは今日、よろしくお願ひいたします。

(司会)

あらうございました。

それでは議事に従って進めさせていただきます。

まず議事の1番、「平成28年度における総合教育会議の議論の基本的な考え方について」事務局から説明をお願ひいたします。

(事務局)

はい。それでは右肩に資料1と書いてます、「平成28年度における総合教育会議の議論の基本的な考え方」をごらんください。

平成28年度における総合教育会議の議論は、昨年度末に策定されました「教育等の振興に関する施策の大綱」のPDCAサイクルをしっかりと回し、大綱に定められた施策を確実に成果へとつなげていくことを目的とする。その際、大綱に不足している施策がある、大綱の施策が期待された成果につながらない、または追加的な施策を講じることによって更なる効果が期待できるなどの事情が確認されれば、大綱の見直しに向けた議論も積極的に行っていくこととし、もって本県の子供たちの「知」・「徳」・「体」の向上、その他本県教育の確実な浮揚を図る。

以上でございます。

(司会)

ただいまの事務局のご説明につきまして、ご意見、ご質問等ございますでしょうか。

ないようでしたら、平成 28 年度の議論の基本的な考え方については、ただいまの事務局説明のとおりとさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それではこの案にてご確認をいただきましたので、続きまして、議事の 2 番目に入りたいと思います。「平成 28 年度総合教育会議の議論の進め方について」、事務局から説明をお願いいたします。

(事務局)

はい、教育政策課でございます。

それでは資料 2 をごらんください。まず、本会議と第 2 期高知県教育振興基本計画推進会議との関係についてご説明を申し上げます。

資料 2 の上段には、それぞれの会議の位置付けについて説明をしておりますけれども、県教育委員会におきましては、教育大綱を踏まえまして、さらに具体的な事業計画まで盛り込んだ第 2 期高知県教育振興基本計画を策定したところでございます。この計画に関する審議を行うために、第 2 期高知県教育振興基本計画推進会議を別途設置をしております。

資料下段には、それぞれの会議の関係について整理をしておりますけれども、基本計画推進会議につきましては、今月 2 日に第 1 回目の会議を開催をして、基本計画の施策の進捗状況等についてご協議をいただいたところであり、その際の主な意見につきましては、本日資料 6 としてお配りをしておるところでございます。こうした意見も参考としながら、本会議におきましては、教育大綱の施策の進捗状況等についてご協議をいただければと考えてございます。

また、先ほどご確認いただきましたとおり、進捗状況の確認を行う中で、教育大綱の改訂の方向性というものもお示しいただけますならば、基本計画推進会議におきましては、その方向性を踏まえて、基本計画としての改訂の方向性について協議をしていただくこととなります。このように 2 つの会議が相互に関連しながら、今年度の議論を進めていくことを考えてございます。

資料の 3 をごらんください。次に、総合教育会議と基本計画推進会議の今後のスケジュール（案）についてご説明をいたします。今月、基本計画推進会議及び総合教育会議をそれぞれ 1 回ずつ開催をしております。以降、その都度明らかとなる最新のデータ等も踏まえながら、それぞれの会議において取組の進捗状況のご確認をいただきたいと考えております。特に年内には、次年度の予算も念頭に置きながら次年度の取組の方向性について、また年明けには、先ほどご確認いただきましたとおり、教育大綱の改訂、さらに基本計画の改訂ということも必要になれば、そのことをご協議いただくことも見込まれておるところでございます。

このようにして、今年度それぞれ 4 回程度の開催を見込んでおるところでございます。

以上でございます。

(司会)

ただいまの説明について、ご意見、ご質問等はございますでしょうか。

なければ、平成 28 年度の議論の進め方は先ほど説明のとおりとさせていただきたいと思
います。

それでは、議事の 3 番目でございます。「平成 28 年度施策の進捗状況について」、事務局
から説明をお願いします。

(事務局)

はい。それでは資料の 4 をごらんください。

資料の 4 は、教育大綱において掲げました基本目標の状況についてでございます。一方
で先ほど知事からご説明がございましたけれども、基本目標や施策の進捗状況を測る上で、
非常に重要なデータとなっております全国学力・学習状況調査の最新の結果につきましては
、例年 8 月末頃に公表されておるところでございますけれども、本年度は公表が遅れま
して今月の 29 日に発表予定となっております。このため、大綱策定時点からデータが更
新されたもの限られておるところでございます、そのような部分に絞ってご説明をさせ
ていただければと思います。

2 ページをごらんください。2 ページは高校生の「知」、学力の状況についてございま
す。上の棒グラフにもありますとおり、本年 4 月に実施いたしました学力定着把握検査に
よりますと、高校 3 年生 4 月の時点で若干 D 層の割合は減っているものの、いまだ D3 層が
約 3 割いるという厳しい状況でございます。また、資料下段の折れ線グラフは高等学校卒
業者の進路の状況についてでございますが、このうちバツ印の折れ線で示されております
進路未定で卒業した割合というものが、直近のデータで 6.3% となっております、昨年
に引き続いて減少するという結果が出てございます。

次に、資料の 5 をごらんください。資料の 5 は、教育大綱の主な施策の進捗状況につ
いてでございます。なお、施策全体の進捗状況につきましては参考資料 1 で分冊としてま
とめてございますけれども、本資料につきましてはその中の重立ったものにつきまして、PDCA
に沿って詳細に整理をしたものとなっております。以降、この中の主な内容についてご
説明を申し上げます。

まず 1 ページは基本方向 1 の小・中学校のパートのうち、対策 1-(2)、地域との連携・
協働の推進でございます。本項目につきましては、大きく分けて 1. 学校支援地域本部の設
置促進、2. 学校支援地域本部の活動内容の充実に沿って取組を進めてございます。これに
関する上半期の取組状況は、真ん中の箱にお示ししておるところでございますけれども、
設置促進につきましては今年度、小・中学校合わせて 126 の学校で取組をスタートしてお
り、昨年度に比べて大きく数を増やしておるところでございます。一方で、活動内容の充

実につきましては真ん中の棒グラフに示しておりますとおり、活動回数が 50 回未満の学校が約 3 分の 1 あるという状況になってございます。また箱の右下に数値を掲載してございますけれども、子供たちへの見守り機能が期待されております民生・児童委員の学校支援地域本部の運営委員会への参加状況は、47.1%となっております、必ずしも十分ではないものと認識をしております。これらの取組の課題といたしましては、右上にまとめてございますけれども、例えば 1 の①に挙げておりますとおり、更なる設置促進のための未実施校へのアプローチを強化していかなければならないといったこと。また、2 の①に挙げておりますとおり、各学校の取組状況には差があるといったようなことがございます。

これらに対する今後の取組といたしましては、設置促進と活動内容の充実の項目において、それぞれ最初に書いてございますけれども、先月に作成いたしまして、本日、参考資料の 3 としてもお配りをしてございます「運用の手引き／モデル事例集」を用いまして全小・中学校に説明に入りたい、というように考えてございます。また、民生・児童委員の参加促進につきましては、2 の②に書いてございますとおり、更なる実態把握に努めるとともに、福祉部局と連携をした要請活動を行ってまいりたいというように考えてございます。

2 ページ目をごらんください。2 ページ目は次に、対策 1-(3)、外部・専門人材の活用の拡充でございます。2 ページ目は、このうちスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用についてまとめております。本項目につきましては、大きく分けまして 1. スクールカウンセラー等、スクールソーシャルワーカーの配置促進、2. それらの人材の活動内容の充実といったことに沿って取組を進めてございます。これに関する上半期の取組状況でございますが、配置促進につきましては 1 の(1)・(2)に数字も挙げておりますとおり、スクールカウンセラー等につきましては小学校以外では 100%の配置率となっております、スクールソーシャルワーカーにつきましても 29 市町村、13 の県立学校に配置をし、年々拡充をしてきておるところでございます。また、相談件数や支援件数につきましても、昨年同時期に比べて増加しておりますのと同時に、1 校当たりの件数といたしましても、増加が見られる状況でございます。また、活動内容の充実につきましては各種研修を実施するとともに、特に今年度は「チーム学校」による支援の充実として、学校と外部・専門人材が協働して効果的に子供の支援に当たるための研修も行ってございます。これらの取組の課題といたしましては、配置促進に向けましては国の予算措置や高い専門性を有する人材の確保といったこと、また活動内容の充実につきましては、更なる専門性の向上といったことが課題となっております。これらに対する今後の取組といたしましては、配置促進につきましては国に対して予算確保に向けた要望を継続して行うということと、また大学と連携した人材の確保にも努めてまいりたいと考えてございます。また、活動内容の充実につきましては 2 の①にございますように、今年度より拡充をして配置をしてございますスーパーバイザー等によるスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーへの指導・助言を継続して行ってまいりたいと考えてございます。

次に、3 ページ目をごらんください。3 ページ目は引き続きまして、同じく外部・専門人材の活用の拡充のうち、運動部活動支援員の活用についてまとめてございます。本項目につきましても大きく分けて、1. 運動部活動支援員の配置拡充、2. 運動部活動支援員の活動内容の充実に沿って取組を進めてございます。これに関する上半期の取組状況でございますが、配置拡充につきましては、118 の部に延べ 87 名を派遣することとしております。この数字の意味するところでございますけれども、円グラフのうちの右側のものをごらんいただきますと、全部活動のうち、斜線部で示されております専門指導者がおらず、指導が難しいとしている部が 22.5% ございますけれども、このうち運動部活動支援員の派遣ができていないところが 275 部ございますので、まだまだ不十分であるというように認識をしてございます。また、活動内容の充実につきましては、「コーチアカデミー」として、運動部活動支援員を対象とした研修を行っておりますのと同時に、望ましい運動部活動の在り方を検討するための外部の有識者を集めた検討会を開催しておるところでございます。これらの取組の課題といたしましては、1 の①にございますとおり、学校側からの派遣申請がもっと上がってきますように、学校側に対する事業の周知でありますとか、学校側のニーズの把握といったことが課題となっております。こういった課題に対する今後の取組といたしましては、1 の①にございますように、学校等に対して分かりやすく事業の周知に努めますとともに、学校側が活用しやすいよう、そういった事業となるように外部指導者に関する情報提供でありますとか、外部指導者の試用期間を設けるなどマッチングが円滑に進むための取組を進めたいと考えてございます。

次に、4 ページ目をごらんください。対策 2- (1) 学力向上に向けての教員同士が学び合う仕組みの構築でございます。本項目につきましては、まず 1 つ目の丸にありますように、いわゆる教科の「タテ持ち」につきまして、県内 9 つの指定校におきまして実践研究を進めておるところでございます。これにつきましては、全ての指定校にミドルリーダーとしての主幹教諭を配置し、その指導の下、教員同士の教科会が実施されること、またその内容が深まるといったことを狙って取組を進めておるところでございます。これに関する上半期の取組状況でございますが、1 主幹教諭の取組につきましては、各教科会に対する指導・助言、その他、若年教員に対する指導などが一定行うことができています。また 2 の教科会の実施促進につきましては、1 教科当たり 20 回程度の教科会が実施されるとともに、日常的な教科会も実施されておるところでございます。また、3 教科会の充実につきましては、(1) にありますようにタテ持ち先進県であります福井県から組織力向上エキスパートとして、月に 1 回程度のペースでそういったエキスパートを招聘し、研究校への訪問指導に当たっていただいております。これらの取組の課題といたしましては、2 教科会の実施促進につきましては、1 つには教科会の時間を確保するために多忙感を持つ教員がいるということ。また、2 つにはヨコ持ちや学年会など、これまでのやり方や考え方をうまく修正できず、戸惑いがある教員もいるということがございます。また、3 教科会の充実につきましては、3 の①にございますとおり、教科会の内

容につきまして、十分に深まっていないものも見受けられるといったことでありますとか、若年教員同士の教科会となっておって、協議の質が高まりにくい学校もあるといったような課題があるところがございます。こういった課題に対する今後の取組といたしましては、教員の多忙感につきましては、部活動の在り方についての見直しを進めるでありますとか、事務職員や外部人材の配置について検討を進めることとし、また教員の意識の問題や教科会の充実につきましては、組織力向上エキスパートや指導主事などによる訪問指導を強化してまいりたいと考えてございます。また、このページでまとめたものの2つ目の丸といたしましては、小規模校の中学校における教科指導力の向上を挙げてございます。こちらにつきましては、近隣の中学校の教員同士が連携して学び合うネットワークの構築を一定の地域へ進めておるところでございますが、地理的な条件もあって、頻繁に集合して研究・協議を行う機会が持ちにくいことから、更に効率的・効果的な方法につきまして研究を推進をするということにしております。

次に、5ページをごらんください。基本方向1の高等学校・特別支援学校のパートのうち、対策2-(1)義務教育段階の学力の定着についてでございます。本項目につきましては大きく分けて、1.学力向上に向けた教員の指導力の向上及び学校の学習指導体制の充実、2.高等学校つなぎ教材の配付・活用、また次ページに、3.インターネット学習教材の活用に沿って取組を進めてございます。これらに関する取組の状況についてでございますが、まず1の(1)の折れ線グラフにございますとおり、現状認識といたしまして、学力定着把握検査を実施しておるところでございます。これによりますとグラフ中、三角マークの折れ線で示されております昨年度の3年生に比しまして、丸のマークで折れ線で示されております本年度の3年生はいわゆるD3層の割合につきまして、2年生の2回目の検査までは継続して減らすことはできているという状況がございます。一方で、3年生の4月の調査で再び増加に転じてしまうという傾向は同じようになってございます。このような分析も踏まえまして、(2)にありますとおり各学校におきましては、学力向上プランを作成をして実施しておるところでございます。また、2.高等学校つなぎ教材の配付・活用につきましては、進学に重点を置く5校を除いた31校において活用がされておる状況でございます。これらの取組の課題といたしまして、例えば、1の(2)に挙げてございますけれども、学力定着把握検査の結果につきまして、個々の生徒のつまずきの原因等の分析が必ずしも十分でない学校があるといったことでありますとか、2の(1)に書いてございますが、高等学校つなぎ教材につきまして、生徒の学力状況等の十分な分析に基づく計画的な活用が必ずしも進んでいない学校もあるといったような課題がございます。こういった課題に対する今後の取組といたしましては、1の(2)でありますとか、2の(1)にございますとおり、指導主事による訪問指導を強化いたしますとともに、特に管理職に対して取組の徹底を図ってまいりたいというように考えてございます。

次に、6ページ目をごらんください。6ページ目は同じ項目のうち、インターネット学習教材の活用についてでございますが、本年度より13校において活用を始めることとしてご

ざいます。個々の学校の視聴環境に問題があったところもございまして、開始が遅れたところもございまして、2学期からは13校全てにおいて本格的に活用が始められる状況となっております。この取組に対する課題といたしましては、先ほども触れましたとおり、設定の問題などにより活用開始が遅れたところがあることでありますとか、(2)の1つ目にございまして、管理職や教員のインターネット学習教材に対する意識に温度差があり、計画的、組織的な活用に至っていない学校があるといったような課題がございます。これらの課題に対する今後の取組といたしましては、(1)の2つ目にございまして、ICTに関して外部の専門支援員の活用を進めることでありますとか、(2)、2つ目にございまして、指定校からの情報集積や関係業者からの助言等を通じて指導主事にノウハウを蓄積し、各学校に対する助言に努めてまいりたいというように考えてございます。

次に、7ページ目をごらんください。基本方向2の対策2-(1)放課後等における学習の場の充実でございます。まず、7ページにつきましては、県として実施をしております放課後学習支援の全体の状況をお示ししております。(1)から(4)までにありますように、小・中学校につきましては、まず(1)として、学校が組織的に行う放課後学習支援員の配置支援、2つ目が福祉部局において実施をしております生活困窮者自立支援事業としての学習支援、3つ目には放課後の安全・安心な居場所を確保する観点から実施をする放課後子ども総合プランの中における学習習慣の定着、4つ目には学校支援地域本部事業の一環として行う放課後学習支援がございます。これらの取組状況につきましては、真ん中の下に表としてまとめておるところでございますが、一部の小規模校などを除いてはおおむねいずれかの事業を活用しながら、放課後学習支援を実施しておるところでございます。これらの取組の課題といたしましては、例えば、①に挙げておりますとおり、学習の場になかなか参加してこない基礎学力が未定着な児童生徒がなおいるということ。また、③にありますように、いずれの事業におきましても学習支援が可能な人材となると、そういった者が不足をしておるという状況がございます。これらに対する今後の取組といたしましては、学習の場に参加しない児童生徒に対しましては、スクールソーシャルワーカー等の専門人材との連携を図りつつ、学習の場へといざなっていく取組が必要と考えてございます。また、地域人材の不足につきましては、地域人材の登録と紹介といったマッチングを県の委託事業として実施をしております学び場人材バンクの拡充を図っていくことを考えてございます。

次に、8ページ目でございますが、引き続き放課後等における学習の場の充実のうち、先ほどの1つ目として挙げました放課後学習支援員の配置の支援に特化をして整理をしたものでございます。本項目につきましては大きく分けて、1 支援員の配置拡充、2 放課後学習の質と量の充実に沿って取組を進めてございます。これらに関する上半期の取組の状況でございますが、配置拡充につきましては、小・中学校合わせて150校340名の支援員を配置をしておるところでございます。また、1の(2)にありますとおり、本年度より「放課後のみ」に加えまして、「授業から放課後補充学習まで」一貫して対応する支援員の

配置を進めておるところでございます、小学校では154名中69名、中学校では186名中73名と一定数の支援員の確保はできたものと考えてございます。これらの取組の課題といたしましては、例えば、2の②、③に挙げてございますように、必ずしも子供の実態に沿った放課後学習の指導計画が十分でないといったところや、学習支援員と教員との連携が十分でないといった学校も見受けられるところでございます。これらに対する今後の取組といたしましては、2の②、③にございますように、より効果的な補充学習の在り方につきまして、成果を上げている学校の事例も含めながら、市町村教育委員会や学校に対して指導をしてみたいというように考えてございます。

次に、1ページ飛ばしまして10ページ目をごらんください。10ページ目は基本方向3の対策(1)と(4)、保育所保育指針・幼稚園教育要領等に沿った指導方法の確立と保幼小の円滑な接続の推進でございます。本項目につきましては大きく分けて、1.教育・保育の質の向上ガイドラインの策定及び各園での活用の推進、2.市町村におけるモデルとなる保幼小接続のための接続期カリキュラムの作成、3.組織的な保幼小連携の全県的な推進に沿って取組を進めてございます。これらに関する上半期の取組状況でございますが、まずガイドラインの策定につきましては若干の遅れが生じているものの、年度内には策定ができる見込みとなっております。また、モデルとなる接続期カリキュラムの作成につきましては、県内の3市町におきまして検討が進められておるところでございます。また、全県的な推進につきましては、研修会の開催のほか保幼小連携について、学校経営計画への反映の促進といったことにも取り組んでおるところでございます。これらの取組の課題といたしましては、例えば、1.に挙げてございますように、ガイドラインの必要性についての理解を十分に図って、実施につなげていくといったようなことが重要と考えてございまして、これに対しましては保育所・幼稚園関係者が集まります幼保推進協議会を通じて周知を図るとともに、指導主事やアドバイザー自身の資質も高めまして普及に努めてまいりたいというように考えてございます。

次に、資料の6でございます。資料の6は、今月2日に開催されました第1回目の基本計画推進会議における主な意見をまとめたものでございます。時間の都合上、個々にはご紹介することができませんけれども、お目通しをいただきまして、協議のご参考としていただければと思っております。

以上でございます。

(司会)

ありがとうございました。

ただいまの説明についてのご質問やご意見については、この後予定をしております学校等からのヒアリングを通じての気付きもあろうかと思っておりますので、その後の時間帯で一括してご議論を賜りたいというふうに考えております。

それでは続きまして、主な取組についての現場からの報告を頂くということで、本日は

高知市立城東中学校の今城校長と、日高村教育委員会の長尾主事、杉本コーディネーターをお招きをいたしております。

それでは、まず、教員同士が学び合う仕組みの構築・放課後等における学習支援の状況について、高知市立城東中学校、今城校長からお願いをしたいと思います。説明に正面のスクリーンを使用いたしますので、尾崎知事と田村教育長には別席をご用意しております。

(今城校長)

城東中学校の校長の今城と申します。よろしく申し上げます。

初めに、本校は、さっきも言ったように組織力向上、それから放課後学習支援、それから探究的学習と県の指定を多く受けております。いわゆる、加配の教員の人数が非常に多く、指定を受けるといふか、これをうまく活用して更に付加価値を付ける取組ということで行ってます。多少幅広く説明いたしますので、またご質問のほうは後の時間でよろしく申し上げます。

まず、本校の学校教育目標です。「心豊かでたくましく、生きる力を身につけた生徒の育成」ということで、(知・徳・体の調和)を目指しています。目指す生徒像は、以下に載ってます。規模的には大分減ってきました、328名、学級数12学級、特別支援がその中で2学級となっております。

まず、本校の課題ですが、高知市に住まれてる方は本校の状況はある程度分かっているとありますが、本校には昭和小学校、それから、江陽小学校、それから、はりまや橋小学校、3校の校区の小学校があるんですが、そこに示されてるように非常に本校への進学率が低いです。今年は、特に60%ぐらいが私学のほうへ抜けるという状況になってます。この状況を受け入れた中での取組を行っていかねばならないということで、そこに下に2つ書いてますけど、この子供たちの学力の向上。当然4割ですので、非常に多岐にわたったいろいろな問題を抱えてるお子さんがいますので、非常に細かな指導が必要であるということと、家庭にも学習の習慣を持たない学生は非常に多くありますので、これを家庭のほうに、いわゆる啓もう活動をするとか、その辺りではなかなか難しいところがありますので、もう学校が積極的にこれを支援する方法を採ってます。それと、僕が知る限り、過去20年以上は、学校からのエスケープ、いわゆる授業からの逃走といいますか、学びからの常時あった学校です。ある学年がなかったってことはあるんですが、学校全体でなかったことはなかったと思います。去年の3年生でそれを実現しました、ゼロを。今年の3年生というか、学校も今、ゼロが続いております。これはまた後で言いますが、生徒と語り合って、とにかく歴史に残れっていうことを生徒たちに言って、彼らは歴史に残ってくれました。今の3年生はこれが本当だと証明しろって言ってます。次の2年生には、これを文化にしろって言ってるんですが。あと、6割も抜けると、やっぱりリーダーとか、その存在が非常に少ないので、それに対応した学級経営とか、不登校もいろんな状況があり

ますので、細かな指導をしております。

2年前、校長に城東中に就いたんですが、その中で2つ、3番と6番だけちょっと書いてますけど。一つは、いわゆる学校の教員っていうのは、かなり専門化してるものが最近ありまして、いわゆる学校の教員は教育は、親が子供を育てるのと一緒なので、それぞれオールラウンドの力をつけなさいってことで、それが重なり合って初めて共に痛みも分かるってことを言ってます。これは、タテ持ちの授業にそのままつながってると思います。6番がいろんな環境がありますので、最初からやっぱり諦め感が多少あった学校でもありますので、とにかくやってみよう。最初にやるしんどさっていうのは、我々が教育者としての尊厳を守るための値打ちのあるしんどさだからと。あと、いろんなことが起こってその事後処理に追われるのは教育者ではないというような話をしております。

結果として、どんな取組やった、こんなことやったあんなことやったじゃなくて、力をどんなものをつけたかじゃないと話にならないからってことを言っております。

例えば、これは1年生だけ、2年生だけ、3年生だけとかですね。学校っていうのは、学年でそういうことは結構あるんで。そうすると、ある学年が駄目だったらここに非難が集中したりとかで、非常に連携どころか多少非難のし合いになったりすると。それがもういろんなふうにならざるを得ない部分が多くなるので、共感し合った協働になるのではないかっていうところで、協働という学習というのも、学習というかわゆるタテ持ちの授業づくりっていうのもその考えから始まっています。

それと、4割の生徒に単純に競い合わせても駄目ですので、今年から、僕のこれ意向ですけど、生徒から教えられたんですが、生徒それぞれが自己新記録を目指し、互いの頑張りを認め合える集団の育成と。これがトータルの城東中のパワーを上げるのではないかと思います。子供たちがやっぱり学力の高低というよりも、もっと分かったことの喜びを割と良かったねって感じでやってる姿を見てから、そういう形を取りました。4つの部会に研究組織が成り立っていて、放課後の加力は学習習慣づくり、それからタテ持ちは授業づくり部になってます。それぞれ支援員さん、それから主幹教諭が主導しております。

まず一番最初に書いてるのは、本校の取組の特徴的なものなんですが、放課後加力教室、夏休み等もやっていますので、これが年間207日間実施しています。夏休みなんかは午前2時間、午後2時間、教員が必ず付いています、支援員さんのほうに加えて。今年は、当初の予定は5,200人の延べ人数のうち320人ちょっとぐらいですから、相当な数になるんですが、の動員を目指したんですが、今年調子が良くて、6,000人ぐらいに行くんじゃないかなと思って目標を掲げてます。それと、当然人は一杯欲しいというのがありますけど、それぞれの人をそれぞれの目標だけを追っていると、これはちょっと多忙感も増えますので、やっぱり学力向上のモデル校を中心にしてシステムづくりとして学校組織力向上。それから中身に関しては、これからいわゆる問われてるアクティブ・ラーニングとかっていうところで探究的な授業づくりをこれをうまく連動してやるってことで、目標を一つにしてからそ

それぞれの指定をこなすということをやっています。それと、習熟度別は、これはもう完全に2年、3年は全授業を習熟度別に分けてます。ここでの学びは、さっきも言ったように「自己新記録を目指し」っていうのを僕に与えてくれたというか、いわゆる苦手な子の授業のほうが楽しいですね。不思議なことに喜ぶんですね、点は余り取れないですけど。それを見てそういう形に変えました。あとは図書館、それから「立志式」、ICTというのが書かれていますけど、それはまた後で報告します。

さっきの順番に行くと、ほぼ年中無休のパワーアップ教室、年間200日以上と。実際に3年前、教頭で突ついたので、そのときに分析してみると、学力が多少伸びてきてましたので、ちょっと気になったのが復習の時間が非常に毎年上がってて、4年連続上がってるんですけど、今年の場合には自校のアンケートからの集計なので、この辺りはまだ新しく出てからじゃないと駄目ですが、かなり伸びてました。それと、さっきも言ったように、5月17日から3月24日の間で約207日かな、ということになっています。これは今年は特に主幹の配置によってから、もう月曜日は誰行く、火曜日は誰行く、僕なんかは月曜日には名前まで入ってますけど、加力教室に誰が行くっていうことも決まって、いわゆる配置はされたけど、更に逆に教員もよけ行くようになったという状況があります。それから、ここに8月までの延べ人数とか、支援員さんは年間12回の校内の学テですかね、1年生の内容だけですけど。そういうものを一応企画してますので、このように。なぜか3年生が一番低いんですが、1年生、2年生が結構高くて、3年生はちょっと困ってるんですけど、こんなことも企画しております。あとこの効果が、いわゆる子供たちの中に加力学習に行くということが、もう抵抗感無くなって城東中の文化になってるので非常に来やすい状況があります。それから低学力層がこの中に行くのかと、強制的じゃないので。その辺りをよく問われるんですが、意図的な声かけと、やっぱりある程度常時毎日やってるところで非常に敷居が低くなっていますので、後で数値をお見せしますが、まず、かなりの数がすくえてるんじゃないかと思っています。それと、教員が今年非常に参加が多くなったのは、タテ持ち的な協働が効果がありで、1年から3年生までを授業に行ってますので、加力教室に行っても、非常にカバーできる学年が多くなって、非常に行きやすくなってるという相乗効果も現れます。これは支援員さんには、もう自分の好きなようにとは言いませんけど、自分のお城のようにいろんなことをしていいよって言ったら、いろんな企画して、いろんな場所にいろんな掲示物とかも作っております。これ夏休みなどで少ないんですけど、こういう形で和気あいあいと、一つの問題を何人かが一緒になって解くとかっていう形が行われています。試験の前なんかになると100人以上来ますので、満席の状態になっています。

先ほど、学力の低位層が実際にこの加力に行ってるのかというところなんですが、非常に間接的なんですが、今年の6月に高知市の調査でアンケートをやったので、例えば、城東中の1、2年生はいわゆる加力も家庭学習に入れてますので、ゼロになりました。いわゆる、しない者が一人もいないという。当然エスケープ等もゼロですので、その日にたまた

ま休んでること以外の可能なのはゼロになってしまったので、かなりすくえてるんじゃないかなと思います。2年生も高知市の平均よりは割と勉強時間がいい状態であります。それと、先ほど言いました復習に関しても、これ27年のデータなので、ちょっと高知県より悪いんですけど、今年の自校のアンケートの数値では、本年度はもしかしたら予習も復習も全国、高知県を抜いてる可能性があるかなとは思ってます。

それぞれの1個ずつの取組では成果上がりませんので、ここに書かれてるように組織力向上、小中連携、それから加力、言語活動、探究的学習、地域協働本部も今年から立ち上げてますので。実際に自己分析が物すごい大切で、これを間違うと、それ以降の取組間違いますので、これにはかなり力を入れてます。それから習熟度、これも中途半端な取組は成果が余り発揮させないと書いてましたけど、半年間やったのと1年間やったのでは、半年間で効果が50%かといったら、下手すると10%ぐらいになっちゃうんで、やるんだったら100でやったらいけますので、そこら辺は他の取組も同じだと思います。

それと、今度は組織力向上、タテ持ちのほうに戻りますが、タテ持ちっていうのは、非常に最初はやっぱりどうしても多忙感があるみたいです。それから、今まで分からなかったところが表へ出てしまうので、嫌がる先生も出てきます。教科会の教科の内容よりも時間の調整とか何かに捉われることがあるので、本校の場合はシーズン制で、ある時期は例えば、数学の研究授業をやるので、それに関わって教科会も連続してやります。当然、授業づくりをワンサイクル、ここにはもう委員会も全部加わってもらって、我々も加わって、授業づくりから教科会をどうするっていうトレーニングを全校研では3回、それから社会と理科は全校研ではやりませんが2回で年間5回やって、教科会のこんな話し合いをしたらいよいよっていうのをシミュレーションするというか、いう形にしています。それがなくてやれやれと言ってもなかなかです。教科によっては回ってる教科もあります。

それから、ここに実際にさっき説明したのが書かれてますが、タテ持ちの効果ってのは、授業だけでとるとなかなか難しいところなんですけど、その考え方をいろんなものに当てはめていくと、実際に職員室の中での生徒の話が多くなりました。1年、2年、3年とそれぞれいわゆる島があるんですけど、それを越えての会話が非常に多くなってきました。さっきも。それからパワーアップ教室への参加も上がって、それから学校内の研修がOJT的な研修が多くなりました。それと、下のほうに書いてますけど、ミドルリーダーがやっぱり何のためにやってるかってところで稼働しだした部分、私のほうも大分楽になっております。

それから実質学力ですけど、学テのほうがちよっと使えませんので、1年生は4割なのに国語は高知市平均で100%です。来年は108かな。全国平均ぐらいにこれいわゆる標準学力テストですけど、持っていきたいなと思ってます。それから2年生は、国語は、約100%ぐらいあったんですけど、現状では100%を超えてると思います。105ぐらいかな。これも一応目標値を110%ぐらい上げてますので、県平均ぐらいには2年生持っていきたいなと思ってます。それから数学は、もともとは今年の1年生99%。今の2年生が非常に頑張っ

ておるんですが、入ったときは高知市平均より低かったです。全国でも 94。高知が 96 と。ちょっと下がってるんですけど、高知が 88 ですのでかなり踏ん張っております。実質、高知平均よりはかなり高い状態になってるので、本番の 29 年で全国平均に迫れるかどうかってところだと思います。もともと、本校余り言いませんけど、四、五年ぐらい前までは高知市の最下層におりましたので、かなり頑張ってるんじゃないかと思います。案外、社会とか理科が非常に高くて県平均超えてます。1 年生はこれですけど。ちょっとこれは見えないうところでこちらもちょうと驚いたんですがこういう結果を示しております。

あと、実際に図書活動というのは、今年、文部科学大臣賞を受けて、これも漢方薬的に非常に効いてるんじゃないかと思ってます。

時間がちょっと来ましたので、「立志式」っていうのをやってまして、このビデオ見せてもいいんですがちょっと時間がないので、ここで生徒は 2 年生の 3 学期に、それぞれ 100 人全員が前でこれからの抱負を語るというのがあります。ちょっとだけ見せましょうか。

(生徒)

将来は、人々の命と向き合う医者という仕事に就きたいです。僕は小 2 のときに大けがをして入院し、そのときから医者になりたいと思いました。医者になるために必要なことを今から頑張っていきたいと思います。そして、今の時間を無駄にしないようにしていきたいです。僕は将来医者になって、特に外科医になりたいです。

(今城校長)

かなり彼長く語ってますのでこちら辺にしときます。

あと、地域の 33 グループとかあるんで、この後、日高のほうでもあるかもしれませんが、地域学校協働本部ってのをやっております。

あと、まとめに入りますが、支援員さんが来れば非常に多忙感が減るんじゃないかっていうのは、僕は物理的なものじゃないと思ってます。実際には、支援員さんが来たから加力学級は支援員さんが仕切るのよってなると教員行かなくなります。「仲間だから一緒にやろう」ということで、ここに運営等任せて研究部とつながったりすると意外に先生たち行きます。そうすると、力倍増しますし、いろんなのを共有できますのでそういう効果のほうで、言うたら心のほうの多忙感が減るといことがあります。

実際には、相乗効果があるって書いてますけど、それと放課後学習に関しては、足りない学テなんかでこの内容が足りないから、ここをしようってことも大事なんですけど、勉強を媒体にして居場所、いわゆる放課後に帰る前に必ずここに寄るといことで、そこから一杯学習につながって学習がやっぱり楽しいものだってなるってところの連鎖が非常にいい効果発してるんじゃないかと思ってます。

タテ持ちに関しては、同じなんですけど、やっぱり同じものを同じように見て議論し合

って一緒にやろうという根本的なところを仕組んでますので、その発想は他の領域に対しても非常に大事であると思ってますので、今非常にうみが出てる状態でなかなか大変ではありませんけど、これがうまくいき出すと、他も回り出すんじゃないかと思ってます。その点では、主幹教諭の配置って非常に大事なんじゃないかと思ってます。

資料はここまでなんですが、最後にこれだけ言って終わりたいと思います。これは、本校がアンケート今まで11年間ぐらいとり続けてあったものです。本校に入学して良かったと思うか。17年には何と教員とかも50%下ってます。こんな状態でした。生徒は案外、その時々、そんなもんかなと思ってて変わらないです。これを見ると、いいとき悪いときあるんですね。最近ずっと同じように上がっていると。これ何表しているかというところ、このとき3年生とかが良かったんですね。3年が動くとき学校全体がよく見えるので周りからも。ところが、その次の学年が非常に荒れてたとかで次の状態になっちゃうと。ただ、3年生は意外に2年とか1年生にちょっと出さなかったら生徒は良かったとかですね。この子らが卒業すると2年、1年がごっちゃとかなるんで、だから実際にはタテ持ち的じゃないので、学校としてどう取り組んだ、みんな生徒取り組んだかって始まってからギザギザが無くなってきたってところを見つけたので、ちょっとプラスアルファで時間超しましたけど報告します。

以上です。すいませんでした。

(司会)

ありがとうございました。

知事、教育長はもとの場所にお戻りをいただければと思います。

ただいまの校長先生のご説明に対しまして、ご質問がありましたらご質問の時間にしたいと思います。校長先生、どうぞ。いかがでしょうか。

じゃあ、竹島先生。

(竹島委員)

竹島です。

7月の中旬に学校訪問させていただきまして、城東と西部中学校のほう行かさせていただきました。それで、学校の環境を整えるっていうか、クラスへ入りまして最初西部のほう行ったんですけども、熱気でむんむんじゃなくてももう本当に暑さで、私たちが入ってこれで生徒や先生集中して本当にできるのかなってすごく感じたんですね。それで、やっぱり市教委とのいろいろな関連もあると思うんですけども、実際、先生が城東に行かれて2年って言われるんですけど、やっぱり他のマンモス中学校見られてやっぱりそこら辺エアコンの設置とかはどう思われますか。

(今城校長)

一問一答で構いませんか。できればつけていただきたいですけど、予算面とかが絶対あると思いますし、ちょうど一番暑い時期に来られたと思うんで、生徒よく頑張っていましたけど、そこは学校長に言われてもなかなかのところがあるので、また、委員会それから市かな。あの辺りとかのほうにも要望してくれたら非常に有り難いです。確かに。

(竹島委員)

やっぱり大変ですよ。

(今城校長)

大変です。大変です。

(竹島委員)

やっぱりそういうのって何か学力だけじゃなくて、やっぱり体力の問題にも関係してくると思うんですね。やっぱり何か女生徒なんかは多分水泳が終わった後で、何か髪の毛も濡れたままだったし、タオル巻いたままやってるって姿も見ましたし、やっぱりちょっとそこら辺でもう少し環境を整えてもらいたいと思うんですけども。

(田村教育長)

施設整備は市の教育委員会ということですので、学校側は当然整備してもらいたいということだと思いますが、それぞれの学校の先生はですね。ただ、要は、市はその施設整備のための予算の問題とかいうようなことがあって、なかなか進んでないということがあるとは思いますが、県市の教育長の会もありますし、いろいろ話し合いをするような場ありますので、そんなような話もあるということは伝えたいと思いますけど。

(竹島委員)

やっぱり5年後、10年後のこと考えた場合、早くやってもらったほうが私は小学校で頑張ってるのに、中学校で何で成績が上がらないかっていうところにもちょっと関係してくるんじゃないかなと思うんですけども、高知市って全然入ってないんですか。

(八田委員)

ここ、理由があるところがある。道路が産業道路で騒音があるとか。

(竹島委員)

前、南国市の香長中学校へ学校訪問されたときも、香長中学校はやっぱり騒音の問題で入ってるって聞きましたけど、何かつける回数は本当に年に数回だとは伺っておりますので、是非早急に何か検討してほしいと私は思いました。

(八田委員)

先生が非常に取り組まれてから、学校の先生方の意識が大きく変わってきていると思うんですね。先生方の意識を変えていく秘訣というか、例えば学校経営の方向性で6番に先生挙げられている、最初から諦めずにやれることを繰り返ささいというようなそういうところに先生方の価値観というか意識を持っていくって非常に難しい課題と思うんですが、先生の何か秘訣というか、何か取組で他の学校でもそういうふうにとったらどうかなというようなこと何かありますでしょうか。

(今城校長)

これが当たってるかどうか分かりませんが、成果が出ないと結果的にやる気にならんです。体感するものは駄目なので、先ほども言いましたように、例えば7割、8割を幾つもやるんじゃなくて、100%を一本でもやるっていうことで、そこで教員が良かったと思ったら、あとはそれが広がっていったって感じはあるのと、苦勞してるんで、このグラフ見ても。本当にやると何か教員の「入学して良かった」が生徒と保護者を超えて去年教員のほうが上がったと。僕はよく教員が高くて生徒と保護者が低かった、批判されたことあるんですけど、教員がいいと思わなかったらいい学校にならんです。だからやっぱり誇りとか、長岡さんとも話すんですけど、当事者意識というか、褒められたらみんながうれしい。校長だけがうれしいんじゃないかっていうところがすごくあるのかなって感じはします。ただ、それをどうして組んだかってのは、もういろんな情報を正確に渡してさあどうするってみんなで考えるしかないというところだとは思いますが、だからリサーチはすごく大事で正しいリサーチで正しい方向導き出さないと、もう間違ったりリサーチで動き出すとこれ徒勞感の山になるからそこかな大事にしてるのは。もし言えばです。

(八田委員)

先生のそういう経験から例えば、今やってる管理職の研修でまだまだ欠けているなというようなことは何かありますか。

(今城校長)

研修してもらって側なんで余り偉そうなこと言えないですけど、自分の学校、いろんな指定事業にはいろんなオプションが付いてきたりするんですけど、それこなしてるだけじゃ話にならないんで、例えばここに書いてある書類は自分が見て役に立たないと意味がないですよね。委員会に提出だけで、それにすごい労力をかけるんだったら意味がないんで僕はどっちかという自分が見て分かるように書いてくれっていつも言ってます、出す前に。じゃないと僕がこれ知らないとか全く学校経営に役に立たないんだからって。だから、その辺りが研修とか何かでも自分の学校をどうするかって実を伴ったものじゃないとどうして

も提出のためとか、何か我々が別の処理をこなして余分に疲弊してるところがあるんでという感じがしてます。委員会は言えばすごくいろんなこと手伝ってくれるんで、でもチーム学校だけじゃなくてチームもいろんなのを引っ張ってくるってことがすごく大事ななと思ってますけど、うちの学校どうするんだろうっていう感じで。

(八田委員)

ありがとうございます。

(平田委員)

平田です。

私自身も教員でございまして。早く今城校長先生にお会いしておりましたら、私も学校運営・学校経営が変わっておったかも分からないなと思いながらお話を聞かせていただきましたけど。先般7月に私も学校のほうを訪問させていただいておりましたので、大変すばらしい学校経営をなさってるということは分かっておりましたけど、今日改めてまた校長先生のご発表を聞きまして大変すごいなと、こう思いました。どこがという点は私も細かくはようお話ししませんが、最後に先生が見せました城東中学校の満足度というのが生徒が90%。保護者も90%。先生が100%に近いですね。

(今城校長)

30人で1人だけそういうのが。100%じゃなくて97%ですね。

(平田委員)

こういう学校というのは管理職としても大変難しいと思いますね。これはすごいなと私は思います。例えば、先生のお言葉の中に個々の子供たちが自分の新記録を見つめようと。こういう表現というのは生徒の心を打てると思いますね、恐らく。この校長さんの下だったら我々もどっかコンプレックスを持ってるんだけど、この校長さんの下だったら救ってもらえるなあという思いがあると思いますね。お話を聞きましても本当に子供のやる気だとか、先生が仕事に一生懸命というような姿が目には浮かびますね。校長先生のリーダーシップを大変と思いますね。八田先生がご質問になった、今城校長先生なんかのような校長先生はどうやって管理職研修で作っていくかというのが高知県の課題でもないかというふうに私は感じました。大変子供の入学段階では大きな課題があると思いますね。私は感じまして。大きな課題があるんですけど、校長先生が絶対子供のせいにはしないという物事の判断がすごいなという感じを受けておりました。どっちからといえば教員が、子供が行かないだとか、子供が駄目だとかいう教員も高知県の中にもいると思います。そうではなくて、子供の実態を踏まえて学校経営をなさってるということを教員として大変すばらしい取り組みをしてると思いました。どうもありがとうございました。

(中橋委員)

中橋です。

ちょっと質問なんですけれども、タテ持ち授業についてなんですが、先ほどのお話の中でタテ持ち授業、いい部分、効果もたくさんあると思うんですけど負の部分として時間の割り振りとかそういったところで時間がとられてしまうというなお話があったと、もう一点あったと思うんですけれども、もう少し具体的にタテ持ち授業をやることのマイナス面っていうんですか。ちょっと負の部分がありましたら教えていただきたいと思います。

(今城校長)

僕自身は最終的には負の部分はないと思っています。ただ、今のヨコ持ちにタテ持ちを入れると、この1年間はいろんなうみが出てくると。例えば数人が非常に実力も伴ってある意味均質した教科だったらすごくうまく動けます。それがすごく差があったりとか、それも年配の人が少し弱かったりすると機能しなくなります。最終的にはタテ持ち制が悪いってふうにも言われることもあります。だけど、それはもしかしたらそれぞれの取り組みが今までヨコ持ちだったら露見しなかった、いわゆるそこにメスが入らなかったところが入ってきたので、そういうものが出てきてるのではないかと。ただ、それはもう我々からすると当然想定内なので、そこから始まるかなっていうところなんで。現時点の部分での細かなところで見るとちょっと誤解もあったりすることは、やはりタテ持ちいかんじゃないかって感じがあるかも知れないけど。長い目で見たら、福井がそうですけど機能し始めるんじゃないかとは思ってます。機能しなかったら逆に何か問題があるんじゃないかなってぐらいに思ってます。

(中橋委員)

現場の先生の間で、今の現段階でちょっと不満が出ているという実態はあるということなんですか。

(今城校長)

そうですね。教科によってってところですね。ただ、数学がちょっと今うち結構大変なんですけど。ただ、もともと少人数でやってたので、いわゆる分割授業で。だからもう相談し合いながらやらないかん環境がもう4年間やってますんで、あるんで。やっぱり構成メンバーです。去年までうまくいったけど、今年何かうまくいかないって言うたら、異動で構成メンバーが変わったりして理解されてなかったりとか、また再構築せないかんって。ここが主幹の腕の見せどころってところではありますけど。

(中橋委員)

じゃあそのシステム自体は先生のご意見としては間違っていないけども、個々の先生方の個性なりによってうまく回らないことも出てくると。

(今城校長)

そうですね。これが文化になれば、こんなもんだよとなれば大きく変わるのかもしれないけど。

(中橋委員)

なるほど。はい。ありがとうございます。

(久松委員)

久松でございます。

この最初のところで要は地域からの進学率が40%しかないということでしたけども。今までずっとこの高知市を中心に私学へ抜けるから、中1で特に、ありていに言えばレベルが低いと。こういう話をいろいろ聞かされてきたんですけども。そういう中で、こういうやり方によっては学力を上げることができるというのは、一般的に言うとき非常に私学へ抜けてレベルが低い生徒と言っているのかどうかあれですけども、学校とか先生、教員の皆さんが諦め感があるというのが一般的、多いんでしょうか。

(今城校長)

はい。僕は附属中学校に16年おったんで、この差がすごく分かるんですけど。実質、城東のお子さんのほうに教えるほうが教員としての能力が要ります。物すごいやっぱりいろんなテクニックが要ったりで。ただ、それを当然ながらいわゆる進学率が高い学校へ行った優秀な教師であるとか。そうでなければそうじゃないっていう形じゃないように感じるようになったら、諦め感は大分減ってきて、これに対してすごい生きがい感じるとかそういうところがあるのではないかと。ただ、やっぱりこのさっきの最後のグラフじゃないですけど、混沌の中ではもう自分の気持ちまで折れるときがやっぱりあったと思いますので。そう思ったときもあったがやないかとは思いますが。

(久松委員)

そういう意味では、校長先生のそういう動機づけ、そしてまた言われたような達成感を味わっていく先生も生徒もそういうことの積み重ねということになっていくわけでしょうか。

(今城校長)

だとは思いますが。高知市の教員決して資質が低いわけじゃなくて。僕も附属から出て十

分優秀な先生を数多くいるんで。ただ、やっぱり現場で子供がうまく動かせなかったりとか、混乱の中でなかなか力が発揮できなかったりっていうので、成功体験がやっぱり少ない。学級経営と一緒になんですけど、そこはそれがあれば諦め感というか、1回2回やっぱり成功した例があればいけるんじゃないかってのがあると思うので、これからやっぱりそれを少しでも教員に増やしていかないかんがやないかなとは思ってますけど。

(田村教育長)

どうもありがとうございます。私も7月に行ったんで、学校が随分いい学校になるなというのは感じてたんですけど。2つあります。1つは今城校長さんの前の校長さんから随分頑張って学校を良くしようということで取り組んでこられたと思うんですね。今城校長先生になって前の校長さんの何を引き継いで何を換えようとしたのかというのが1点と、それからタテ持ち的協働の話を言われてます。それは教科のタテ持ちがきっかけになって、他のそういうタテ持ち的協働が広がってきたということかなというふうにはお聞きしたんですが。ちょっとそれがどういうふうにしてつながっていったのかとかいうような辺りもちょっとお聞かせいただいたらと思いますけど。

(今城校長)

田中校長とはいろんな話もしましたので。僕と田中校長はまるっきりタイプが違うんですけど。教育に関しては非常に接点が多くて。実質、例えば「立志式」にせよ加力にせよ、本当にいいものを残していったと思ってます。僕が得意な部分は逆にコーディネートしたりとか付加価値付けたりとかってところですので。これ最初に僕が田中先生の時代に思ってこれを導入したかどうかというたらずごく勇気が要る。職員と戦わないかんような内容ばっかしなので。その点ではもうブラッシュアップじゃないですけど、同一者みたいな形で田中先生のを引き継いで僕なりに質を上げていったのが本当です。なかなかやっぱり全部を変えるとかなくて。いいものはもうみんな引き継いでうまく利用せないかんとかありますので。それともう一つはタテ持ちに関しては、もともとちょっとそういう発想があったのは事実です。「もうちょっとみんなで一緒にやろうよ」ってなったんで。隣の人の仕事が見えないといけないよってのもあって。やっぱり批判し合う職場があったんですね。自分の部署で100%やれば隣がやってなかったらラインが止まってしまうので。そうすると批判が行くんですね。これはやっぱり良くないなってなったんで。仕事ちょっとしんどくなるけど、重ねてみたりした矢先に入ってきたので非常に効果的だったというか。あれは本当に一緒にみんなでやろうよというシステムですので。学力を上げるってのは一番本丸かもしれないですけど、その点ではそれが一番良かったかなとは思ってます。

(尾崎知事)

今日はありがとうございます。先生のお話伺ってたら本当にシステム全体をよく見て、それを全体をよく把握して取り組んでいこうというお話。さらには特にリトルアーリーサクセスみたいなのを大事にして全体のモチベーションを上げていこうとされるお取り組みとか、本当に学校全体のマネジメントってのが、物すごく重視されて取り組んでおられ、成果を上げておられるんだってのが本当によく分かります。今日お話をお伺いした中で多分城東中学校でタテ持ちがどう機能してるかっていうことが1つの多分争点なんだろうと思うんですね。お話の中でもいろいろございましたけれども、それから中橋先生もお話しになりましたけれども、やっぱり実際にお取り組みいただく中でメリットとデメリットってのをクリアにしていって、来年以降の改善につなげていくということが非常に大事だろうとそうのように思っています。これはタテ持ち導入した一番の理由ってのは何なのかといういろいろな議論がある、いろんな側面があるんだろうと思いますが、1つにはチーム学校としてお互いチームとして動ける、そういう学校にしていこうじゃないか。それが1つですね。あともう一つはやっぱりOJTの機能する職場にしていきたいものだなと。それが非常に大きかったと思うわけです。

例えばある学年の数学はこの先生1人でやってると。その先生の仕事ぶりについては事実上誰も日々見ている人がいないと。本人が自分だけでやってますと。そうになってしまうと、おのずとそれはどんな職場だってぬるま湯になってしまうわけで。およそ会社なるものは同僚がいて上司がいて、特に上司はその部下の働きぶりというのを見てて、そしてそれについて、やっぱり指導を行って行って、特に若いころはそういう先輩から毎日毎日教えてもらうことが非常にその人の糧になるということになって続いていくということになるんだろうと思うんですね。だからそういう意味において、多分タテ持ち導入当初ってのは、きついんだろうと思いますし、不満も出るだろうと思うんですね。なぜかという横の先生からもいろいろ言われたり、指導主事が来ていろいろ指導されたりもして厳しいだろうと、それは思います。ただ、それがいい方向でのOJTに向かっていくということであれば、一時的に確かにきついなとなったとしても、いずれ振り返ったときに、「ああ、あのときにああやっていた先輩に教えてもらって良かったな」とか、もしくはまた先輩の方でも「なるほど、若い人からこういうことを言ってもらったんで自分も1つ気づきがあったね」とか、そういう方向に向かっていってくれるのでは、とそういうふうに思うわけです。チームワーク協働のほうの関係の話についてはいろいろお話伺ったわけですが、もう1点いわゆるタテ持ちの教科会等を通じてOJTが機能しているかどうか。さっきちらっとお話あったと思うんですが。ほぼ同質だと機能するけども、力量差に物すごく差があると余り機能しないのではないかとかってお話があったと思います。この教科会において特に若い先生方、中堅の先生もそうなのかもしれませんが、OJTが機能するようにするためには、例えばどういう工夫が必要だと思われるか、是非そういう点ちょっとアドバイス頂ければと、そのように思います。

(今城校長)

いわゆる教科の集まりだけとかだったら、確かにそういう年により教科により、教員の構成によってなかなか機能しないことがあるんですけど。例えば研修等でも実質いわゆる学年ばらばらにしても、いろんな話ができるようにはなってます。

例えばQUっていうのがあるんですけど、その分析は自校で講師呼ばずやってるんですが、2つの学級ずつをチームに分けてやるんです。そこにばらばらに入れてもその学級のことを知っているメンバーが多いんで、できるようになってます。それから、いわゆるOJTをする場所がすごく多く取ると、そこでその先生に対する見方が教科だけじゃなくて変わったりで、もう少し教科だけで「あの先生はこうだからいけない」というのがまた違ったところでも見たりとかって幾つものそういうのであると、多少その辺りが和らぐということはあると思います。だから、多くの機会ですべてのものをシェイクしてやっていると、ばらつきもある程度は解消されていくのかなと。そうするとばらつきもまた減ってくると思う。

(尾崎知事)

一定むしろばらつきがあったほうが。すごくできる先生が、余りこれからっていう若手の先生方を日々指導できて、そういう意味ではその若手の先生方の力量の向上につながっていくのではないのでしょうかね。そこがちょっと不思議だったんですけどね。

(今城校長)

余りこの場であれですけど。若手ってなかなか優秀です、最近は。それ以外の問題が。

(尾崎知事)

むしろ逆だったりしてるわけ。

(今城校長)

逆が多いです。

(尾崎知事)

なるほど。分かりました。じゃあ、逆に言うと、先輩のほうも良き若手に刺激をされて、刺激を受けておられるのでしょうかね。

(今城校長)

そうだと思いますよ。意識改革に対して。

(尾崎知事)

なるほど。

(今城校長)

やっぱりいろんな面でリーダーシップをとってます。学年主任クラスだと僕は思ってます。

(尾崎知事)

タテ持ちで指導主事が来られていろいろ指導をされますでしょう。それはどうですか。機能してる感じですか。

(今城校長)

特に、福井から来られる元校長先生、エキスパートですかね。勉強になります。本当にやっぱり管理職として、教育者なんだっていうのが、はっきり言えば教科の専門家。やっぱりそこがまずベースになっての管理職だなというのが、ひしひしと感ずるので。だから、何かそればかりしに行くと何か学級はただって生徒指導できないっていうそんな感じじゃなくて。まずはそこがあって初めてそれでいろんなことがそこに乗っかってるっていうのを感じ取ることができるので、職員も一緒に主幹なんか一緒に話しますから、「やっぱりすごいね」ということは言ってますので、感化受けているとは思いますが。指導主事も何も。委員会も来てくれての話です。

(司会)

ありがとうございました。では、今城校長、ありがとうございました。

(尾崎知事)

どうもありがとうございました。

(司会)

続きまして、「学校と地域の連携・協働」の状況について、日高村教育委員長尾主事、杉本コーディネーター、よろしくお願いいたします。

(長尾主事)

どうも、本日は発表のお時間を頂き誠にありがとうございます。日高村教育委員会地域教育係、社会教育のほうになりますが、社会教育主事の長尾と申します。

(杉本コーディネーター)

学校支援コーディネーターの杉本と申します。よろしくお願いいたします。

(長尾主事)

本日はよろしく申し上げます。それでは、すいません、座って説明させていただきます。それでは、まず、自分のほうから日高村での学校支援地域本部事業について、概要の説明をさせていただきたいと思います。

資料2の1ページ目をごらんください。まず、活動の経緯・概要・特徴というところで、本村の事業についてご説明をさせていただきます。まず、平成15年度、土佐の教育改革により発足した地域団体がありまして、それが日高村子どもの未来応援団という組織がありました。それを平成21年度より引き継ぐ形で、学校支援地域本部事業を実施しております。現在は、教育委員会のほうが主体となりまして、小中3校を一人のコーディネーターが担当するというところで、ちょっとかなりコーディネーターのほうにウエートがいておりますが、実施しております。今年で8年目を迎えることとなりますが、やはり当初は学校支援という認知度がかなり低くて、ボランティアの方もしかり、学校ともなかなか浸透してなかったということもありまして、度々学校のほうやボランティアのほうに学校支援の説明を行ったりとか、ボランティアとの顔をつなぐために、直接訪問もしたりとかして、ネットワークに努めていきました。時にはですけれども、学校長がやはり替わったということで、教育方針、学校方針が変わって、学校支援の取組もかなり左右されたというようなこともありました。そんな活動を積み重ねる中、活動においては、学校区が日高村3校、教育委員会のところが中学校区が3校ということもあったというのと、あと、教育委員会側が学校支援を取りまとめたということですね。各学校の支援状況の共有であったりとか、他の学校への水平展開もすることができまして、各校への事務負担の軽減であったりとか、またフットワークも軽く活動が行えたなど、いろいろメリットがありました。また、うち2校がコミュニティ・スクールの指定校を受けまして、学校支援活動や事業の理解のほうに学校側としても飛躍的に浸透しまして、実際に学校支援の活動が増えたり、お互いやはり知ることで、学校、地域のほうも積極的に協力をさせていただくような土壌が生まれました。また、平成15年度より、先ほどご紹介させてもらった地域が、そういう団体があったということで、非常に学校支援、日高村の子供を育てるといった土壌があったということで、様々なプラス要因がかみ合って日高村という地域に合った学校支援活動が現在できていると思っております。WIN&WINの関係とありますが、今後8年目を迎えたということで、かなり継続という点に最近では不安を感じております。学校と地域双方に負担感を感じない。そして、やりがいがあるような生涯学習の視点を持ちまして、WIN&WINの関係を意識して活動を行うこと。また、PDCAサイクルを回して今後学校からの依頼であったりとか、活動の内容をデータ化、紙面化していくことによって引き継ぎのほうを強化していきたいというふうに考えております。

それでは、お手元の資料のページ右側には、簡単ではありますが、基本データを掲載しております。特に県の事業として活用させていただいているのが、学校支援地域本部事業、

土曜教育推進事業、又は中央西福祉保健所のほうから生活困窮者自立支援事業の学習支援の部分ですね。それを活用させていただいております。また、昨年度におきましては、ICT機器に係る補助金も活用させていただきまして、実施をしております。また、その下には、学校支援地域本部事業の活動データ及び放課後学習室のデータを掲載しております。ちょっと時間の関係で、放課後学習室の取組をメインで、ご説明をさせていただきたいと考えておりますが。

まず、ちょっと中ほどの日高中学校の放課後学習室の説明を少しだけさせていただきたいと思います。現在は、日高中学校の空き教室を利用させていただきまして、週3前後で下校時に実施しております。また、夏季休暇や土曜日の不定期も開催しております。英数を中心とした学習支援がメインとなっております。指導員は地域住民及び大学生を構成した2から3名程度で対応をしております。今年からはタブレット等ICT機器も活用させていただきまして、多様な学習を行っております。

最後に、ちょっとデータのほうなんですけれども、昨年度こういった活動、事業を活用させていただいたことによる実施回数は166日。生徒数が78名に対し1日平均7.8人の参加者となっております。

すいません、資料の左側の下をごらんください。日高中学校放課後学習室の取組及び特徴というところです。このような活動を展開しておりますが、日高村の取組の特徴として、コーディネーターが、先ほどご紹介しましたが、3役を担っているというところがあります。ちょっと図1を見ていただきながらとは思いますが、1つは地域と学校をつなぐコーディネーター業務。2つ目は、授業時のサポートを行うボランティアとしての教育支援員。3つ目は、放課後学習室の指導員という役を担っていただいております。これは本当に一人に役が関わることになるんですけれども、反面、地域、学校、生徒に触れる役を持ち、学校や生徒との信頼関係の構築であったりとか、学習における生徒の情報の共有など、様々な効果を発揮しております。例えば教育支援員という立場になりましたら、通常の授業に関わることで生徒との信頼関係の築きにつながり、また、日高中学校放課後学習室、こちら自由参加となっておりますが、参加者の増をもたしたり、学校側としても学習室への生徒をつなぐなどの連携を図ることで、生徒の学習状況や不登校状況の情報が共有できまして、柔軟な対応ができています。指導員は地域住民及び大学生と共にならして、学習支援はもとよりキャリア教育の側面もあります。隣の図の2をちょっとごらんいただきたいのですが、活動の積み重ねのお陰で年々在校生徒数がかなり減少している中、参加率という点を見たら年々上昇傾向がありまして、最後は10.1%という数字となっております。

では、この放課後学習室のことにつきまして、担当しております杉本のほうより説明をさせていただきます。

(杉本コーディネーター)

こんにちは。杉本です。

2 ページ目をごらんください。私は通常、中学校に席を置き、不登校支援に関わったり、T2 でクラスに入らせていただいています。学校支援依頼があればその活動や事務に携わり、放課後は学習室の指導員として動いています。職員室にいたので、先生方とは日常的に交流が図れ、子供たちやクラスの状況が自然と感じ取れます。そんな中で、問題を抱えている生徒について、小学校のときの様子など先生のほうから私に聞かれることもあります。授業でT2に入ったときは、戸惑っている子供に声がけをしたり、廊下ですれ違った際に挨拶をして、人間関係を築くようにしています。また、体育祭や学校行事にも関わり生徒たちを身近に感じています。

そんな私の活動の一つ、放課後学習室について、お話をさせていただきます。放課後学習室には、クラブ活動に所属していない生徒が中心にやってきます。10月からはクラブ活動を卒業した3年生も参加し始めます。学習室では、自学や授業で分からなかったところなど、思い思いに取り組んでいます。時には、おしゃべりや相談。「〇〇先生がむかつく」、「だって、聞いて、聞いて」などもあります。

資料始めの、学習室に来てくれる生徒について、お話しさせていただきます。いろんな生徒がやってきますが、その中の2例をお話しさせていただきます。

まず、放課後学習室に来てくれるようになった生徒。この生徒の背景には、複雑な家庭環境があり、満たされない心があります。中学校入学当初は登校できており、「先生、学習室に来るからね」と言っていました。が、体調不良がきっかけで6月頃から不登校となりました。この生徒が学習室に来るようになったきっかけは、担任の先生も学校とのつながりに学習室へと促してくれたこともあり、また、この生徒が小学校6年生のときミシンやプリント丸付けなどの学習支援に関わりがあったことです。現状は、夏休み中、学習室は1回を除き毎回参加できました。同級生が隣に座ることで会話のきっかけとなり、異学年の生徒さんたちとも交流が持て、一緒に遊ぶ約束もしていました。2学期初日は、宿題が終わっていないと言いながらも登校できましたが、今は来れておりません。

次に、高校生になっても来てくれる生徒です。中学校時代の背景は、遅刻、欠席が多い。先生が家に迎えに行っても親子とも悪びれた様子もない。そんなことの連続で、先生もどうしたら良いか思い悩んでいました。教師でも駄目。親でも駄目。先生や親以外の大人と接してもらいたいという先生の思いがありました。先生が生徒を親御さんと一緒に学習室に連れてこられ、私に紹介してくれました。現状は、現在、高校2年生になっておりますが、紹介してくれた日から卒業まで毎回学習室に参加しており、高校生になっても「数学を教えて」と来てくれます。中学校時代に話せなかった自分の生い立ちや悩み事など話してくれ、高校卒業後の進路についても相談があります。大切に生きて行くこと、自立した大人になることなど、感じてくれればと思います。でも、随分大人になりました。放課後学習教室を卒業した高校生の中には、町で見掛けたときに、「夏休みに手伝いに来てね、顔出してね」とお声をかけたところ、今年の夏休みには友達6人を誘って夏休みの学習室に

やってきてくださって、そして各机に高校生が一人ずつついてくれました。先生の思いや私の思いですが、子供は「先生やきこう言うがよ」、「親はちっとも分かってくれない」などの主張があります。しかし、親は自分の規範意識の中で親の立場で子供に接し、先生もまた教師としての立場で生徒に接します。この先生が学習室に生徒を連れてきた背景には、親や教師という立場や枠に捕らわれない第三の大人と関わることによって、自分自身のあるべき姿に気付いてほしい、生きていく上での大切な価値観や常識を知ってほしい、自分の家庭以外の世界を知ってほしい、という思いがあったのではないかと思います。そして、その関わりの場が放課後学習室です。生徒や先生の思いを今まで多く聞いてきました。生徒と話すときは言い分を徹底的に聞いています。生徒の思いに触れ、一歩前に出てもらうと感じています。一歩前に行く行動が抱えている問題の突破口になると考えます。

中学校で言えば、学習室に来ることもその一つです。A君の話です。私は学校支援活動を通して、両親がいないA君のことを小学校のときから知っていました。A君は頭も良く、発想力・理解力は抜群です。学習室をのぞくので、「A君、おいで。寄っていかん」と声をかけるのですが、「俺、クラブやき」とA君を見かけると、そんな会話を繰り返していました。ある日、漢字の書き取りの課題が終わっていなかったA君は、クラブの顧問より教室で終わらせてから来るようにと指示をされていました。いつの間にかA君は学習室へやってきて、書き取りの続きをしていました。そのときの会話です。「A君、頭もえい。発想力や理解力も抜群やけん、繰り返し学習をしたり、じっくり取り組むところが弱い、テストの点に反映できんね。もったいないね」「それ、俺に全然ないところや」「それが身に付いたら生きる力が強くなって、大人になったとき何でもできるようになる」「へえ」「字を丁寧に書いてごらん。その力がつくよ」。A君の顔が変わります。そんなとき私自身もとてもうれしく、喜びを子供たちからもらっています。放課後学習室という居場所です。放課後学習室は、先生や一人一人の生徒たちの思いが行き交い、その思いがつながる場所です。そして、生徒に寄り添い、先生や生徒との信頼を積み重ねる中で、学校でもない、塾でもない、生徒にとっての居場所にもなっています。この居場所があることで、学力向上、将来の目標を持つ、楽しい学校生活を送るなど、ひいては生きる力を育む一助となればとの思いです。少し生意気で、少し斜めで、少し難しい。そんな年代の子供たちと関わるのは時に心しんどくなりますが、信頼関係が生まれたときや心通ったときは、人としての純粹さや思いやりに触れられ喜びに変わります。

以上です。

(司会)

ありがとうございました。そうしましたら、先ほどの説明に対しまして、ご質問がありましたら。

(長尾主事)

最後に一点だけ、すみません補足をさせてください。申し訳ないです。こちら先ほど紹介させていただきましたが、本当に学校の協力と、あと校長先生のほうにもいろんな方面で紹介していただいています。学力のほうも上昇があったというふうに聞いております。最後になりますが、すみません。アンケートをちょっと1点掲載させてもらっております。これが遡ること2012年になりますが、小・中学校保護者と地域住民を対象にしたアンケートの一例を載せております。ある企業が行った全国を対象にした類似のアンケート結果では、学力向上を望む声があった中、日高村で行った場合には上位5項目が礼儀や規範意識など生き抜く力を望む項目が占めておりました。現在、放課後学習室、生涯学習という点で実施している点とかが主ですけれども、こういった子供の前向きな姿勢が学びたいという子供たちの主体的な学びを支えていると考えております。今後も日高村地域の子供を育むべく、教育委員会、地域、学校とで協働して、チーム学校として一丸となり活動を展開していきたいと考えております。どうもありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。失礼しました。

それでは、先ほどの説明に対するご質問がありましたらよろしくお願いします。

(中橋委員)

すみません。基本的なデータで、ちょっと勉強不足で申し訳ないんですけども、小学校が2校あるんですよね。それぞれの小学校の生徒数というのは、今何人ぐらいずつなんですか。

(長尾主事)

すみません。ちょっとうろ覚えになりますが、一つは複式学級の学校になりまして16名というふうになっております。もう一つの小学校が110名ぐらいやったと思います。すみません。はい。

(中橋委員)

その2校の小学校から中学校が78人。

(長尾主事)

そうです。78名。

(中橋委員)

それ以外は、どこか私学に抜けたりということですか。

(長尾主事)

そうですね。一部私学に抜けたりとはなりますが、ほとんど中学校のほうに入っています。

(中橋委員)

そうですね。なるほど。そうですね。学年違いやね。はい。ほとんどの小学校の地域の子が、日高中学校に来ることなんですね。はい。中学校の取組というのを聞かせてもらったんですけども、小学校での具体的な取組というのはどんなことがなされているんですか。

(長尾主事)

はい。特に大きい日下小学校のほうになりますけれども。最近では、例えば運動会のときの1年生2年生がマスト登りが登れないとかってなったときに、休み時間に地域の方が支えたりとかというような行事支援であったりとか、あと授業の丸付けであったりとか特に一番多いのがミシンの授業ですね。学校の先生が授業時間内にどうしても教える个体差があるということもあって、そこでボランティアの方が一斉に支援をしてくださることで、授業時間内にミシンの授業が終わったとかということもあります。そういうのを一つ事例として他の小学校にもご紹介したら、是非やってほしいというようなこともありました。特に小学校においては、中学校と比べたらかなり自由度が高いので。あとは例えば、課外活動の授業の付添いであったりとか、そういったこともあります。

(中橋委員)

最後、すみません。今、コーディネーターがお一人ということですけども。人数増やしてもらいたい一杯一杯なのか、今ちょうどなのか、それはどんな感じですか。

(杉本コーディネーター)

ちょうどです。

(中橋委員)

ありがとうございます。

(竹島委員)

コーディネーターの方というのは、元教師の方なんですか。地域の。すみません。

(杉本コーディネーター)

すみません、主婦です。そして私は日高村出身じゃなくて、土佐市から毎日通っており

ます。でも、主婦ですけど30歳ぐらいから土佐市の中学校の先生から、家庭が荒れてどうしようもない、この子は荒れて高校行くところもないので、この子を見てあげてほしいという、塾という形で見てあげてほしいということがきっかけで、ずっと家庭で中学生の塾をしてました。そんなところ、土佐市の研究所のほうから、不登校に携わってほしいということで、私ともう一人2名で、一人の方は高岡中学校専任だったんですが、私のほうは土佐市の小・中学校の不登校支援にぐるぐるぐるぐる毎日回って、いろんな先生、いろんな校長先生とも接してきてましたが、本当はそれが続けたくて、楽しくて。でも、ちょっと父の面倒を看るということで一旦辞め、それが終わったところでこちらから声がかかりました。はい。

(竹島委員)

学校にも一緒にいらっしゃるって説明があったんですけども、毎日学校にいらっしゃってるってことでいいんですか。

(杉本コーディネーター)

出勤は、中学校出勤です。用があるとき役場に行って、いう形です。

(長尾主事)

ちょっと補足ですけども、事務所のほうが日高中学校のほうに拠点がありまして、4時間というふうになっちゃうんですけども、うち2時間をコーディネーター業務、その辺は日によっては動きがあります。あとうちの2時間は、教育支援ボランティアとしてサポートに入ってもらってます。放課後学習室で他に依頼があった場合には、その時間はコーディネーターっていう形でシフトをしながらサポートに当たってもらってます。

(竹島委員)

これからこれをどのようにこれを普及させていくようにするんですか。

(長尾主事)

そうですね。普及というところもちろんありますけれども、本当に8年目でようやくと言ったら語弊があるがですけども、かなり安定した継続というのできております。普及ももちろん、それこそ対外的にっていうところもありますけれども、それが逆に日高村に返ってきてそれが日高村の活動はすごいんだというような。地域の方も学校の方にも自信を持ってもらいたいという点と、あとはこの活動をいかに継続させていくかという点を中心にウエートを置いております。もちろん、いろいろなアイデアを取り入れての発展というのも考えていきたいとは思っております。はい。

(竹島委員)

何かすごい、すばらしい。一人3役で、すばらしいと思います。頑張ってください。ありがとうございました。

(司会)

ほかにいかがでしょうか。

(田村教育長)

ありがとうございました。2つちょっと教えてください。放課後学習室の参加状況ですね。年々参加比率が増えてきているということでご説明を頂いております。このあれを見ると、24、25、26と急激に参加率が伸びてきたということ。27年になってちょっと若干伸びが鈍化したかなみたいな感じもあるんですが。一つは急激に伸びてきたことの理由というか、要因はどんなことによるのかなということと、それからちょっと頭打ち感あるんですけども、大体、最終的にいうとどのくらいの参加率があればいいというふうに考えられているのか。目標ということでもいいですけども、どのくらいの目標で考えられているのかということも教えてもらいたい。それが第一点です。それから、コミュニティ・スクールと学校支援地域本部とセットでやられてるということで、国のほうもコミュニティ・スクールとセットでやるということ推奨というか、進めているんですけども、その良さですね。一緒にやることの。そこをもう少しちょっと教えていただく。あるいは、もう一つは逆にコミュニティ・スクールにいることについて、どんな問題があつて、そこをどういうふうクリアされたのかという辺りも、ちょっと教えていただいたらと思いますけど。

(長尾主事)

はい。ご説明させていただきます。それこそまず1つ目の学習室の参加状況というところで、要因としては大きく2点あるかと思います。特に24年から25年に変わる際にあったんですけども、実はこのときに24年までは放課後の子供教室のほうでやっておりました。子供の安心・安全の居場所づくりというところでやってたところなんですけれども。ただ、学力向上というところも視野に入れたいということもありまして、ボランティアの方でやっていただくような学習支援を、学習室をというところで、平成25年度から学校支援地域本部事業のほうで実施をしているという点が1つです。また、先ほど教育長からも言っていたようにコミュニティ・スクールのほうが始まったのが、平成24年から25年の間です。それがこの後につながるかもしれませんが、また後ほど説明させていただきます。今この10点、それこそちょっとだんだん頭打ちになってきゆうというところでもありますが、言うたら1年生2年生は放課後の時間帯にやってるということもありまして、クラブ活動を実施しております。できるだけ学校としては、クラブ活動のほうに従事するよというところで推奨しております。ただ、やはり入っていない子供もおりま

すので、その子供はこの放課後学習室を1つの部活というふうに当て込んで、学校のほうは全員に参加しなさいというふうに言ってくれています。また、部活が休みのときであったりとか夏休みのときであったりとか。あと、試験期間中。3年生に至っては10月、11月ぐらいから部活が終わりになりますので、その後は学校は強力に「放課後学習室に行きなさい」というようなサポートの下、特に26年、27年はこういった活動で学校のほうも大分支えていただきました。今、現状この数字でちょっと横ばいになってきているのが、ある一定学校の協力も得てのこの数値というふうになってきておりますので、目標と言いますと今こういう学校との連携ができている状況を維持しつつ、それこそこの1割参加というのが一つ自分たちのほうの指標になろうかと思っておりますので、逆にこの1割を切らないぐらいにもっと積極的に当たっていったらなというふうには思っております。

続いてのコミュニティ・スクールのほうにつきましてですが、やはり、こう言うのは本当に失礼なあれかもしれませんが、教育委員会のほうからやはり学校支援というのを推進してきたということもありまして、学校のほうに学校支援ということを説明する際に、今本当に県下でやっていただきゆうというものもあるんですけれども。やはり新しい事業ということもあって、かなり抵抗感があったというところがあります。いろいろな事例をご説明しますが、学校のほうでできますというふうなやっぱり当初はそういう意見もありました。そういったところで、コミュニティ・スクールの指定を受けるというふうになりまして、学校運営の中に地域の方が入っていただくことによって、日高村として日高の子供を育てるという意識が地域、学校のほうで共有ができたということと、それに伴って地域の方に学校をサポートしてもらおうと。そのためにはどうしたらいいかということで、学校支援をやっておりますということで、コミュニティ・スクールがブレーンとなって、学校支援地域本部事業が手足というような形で実現ができていているというので、飛躍的に活動が両輪とよく言われる、正にそのとおりだと思いますが、そういった形でお互いが知ることで活動が理解して、活動がかなり深みがあるようになってきているかと思えます。

問題なんですけども、かなりそのコミュニティ・スクールも学校支援も先ほども言いましたが、先にコミュニティ・スクールとは何ぞや、学校支援とは何ぞやという認識までに至る経緯がかなりどうしても時間が掛かったとは思っています。今は本当に学校のこと、地域のことをお互いに情報を交換し合うことで共有ができ、思いやり、理解ができて、そういう今段階になっておりますので、今の現状としては非常にいいのではないかなというふうに感じております。

(田村教育長)

ありがとうございます。コミュニティ・スクールを取り組みましょうっていう話はどこ。教委のほうから大体仕掛けたんですか。

(長尾主事)

はい、そうですね。学校支援地域本部事業も教育委員会がというところもありますが、当初の日高村の教育目標が「学社融合」というところもありまして、将来的になかなかいろいろ様々な問題を抱える子供も増えてくるだろうというところで、その当時の教育長が「コミュニティ・スクールのほうも教育委員会からもうやって」というような指示がありまして。複式学級で言う先ほど在校生徒数が16名のところは、かなり地域との学校の連携ができていたというところもありまして、他の2校はコミュニティ・スクールを指定して地域と共に学校をやってくれというところから出発しております。はい。

(司会)

ほかはよろしいでしょうか。

(尾崎知事)

どうもありがとうございます。

2点、ちょっとお話をお伺いさせていただきたいんですけどもね。

1点は僕の質問というか。この学校支援地域本部の中で、こういう放課後の学習室の取組をされてるのは本当に素晴らしいと思います。部活とかそういうものについて、地域の皆さん方のご協力が得られてる事例とか、そういうのがあったら教えていただければ有り難いなというのが1点目ですね。

それとあと、この放課後の学習室についてのこのスタンスといいますか、やっぱり居場所がファーストというそういう感じですかね。さっき金城先生の最後のまとめの部分のお話にもあった、加力学習というのは単なる授業の延長ではないと、放課後の学習を媒体とした生徒の居場所なのであると、結果としてそのスタンスのほうが学力向上に効果を発すると考えるってお話もあって、ああなるほどなとも思ったところなんです。一言で言うと、確かに下のようにどのような子供に育ててほしいかで、学力向上っていうのは少ないのかもしれませんが、ただ物事の良い悪いの判断ができるようになるとか、何事にも粘り強く取り組めるようになる、人の話をしっかり聞けるようになるためにもやっぱり学力っていうのは必要なものであって、まずそういう意味において「知」・「徳」・「体」というのはバランス良く育てていくということが大事ということなのだろうと、そのように思いますけれども。やっぱりこの放課後学習室においても、やっぱり特に厳しい環境にある子供たち、例えば家庭学習の機会に恵まれてないとか、経済的な事情で塾になかなか行き難いとか、そういうお子さんたちにもしっかり学ぶ場・機会というのを提供できるようにしたいものだなと。そういう意味において、この放課後学習室的な取組のいわゆる教育力の向上とといいますか、学習上の教育力の向上というのは一つの課題なのかなと思っておるんですね。ただその中で、やっぱりこの居場所的側面というのがお二人の今日お話、ご三人のお話を伺っていくと、やっぱりこの居場所というものを大事にしないと、どちらかという子供たちが来なくなっちゃうのかなとか、そんなこともお話伺って感じたところなんで

すけれども。ちょっとそこの辺りいろいろご教示いただければ幸いなんですけれども。

2つです、はい。

(長尾主事)

すみません。まず、部活のほうについてですけれども、中学校のほうでは現在たまにですけれども、吹奏楽部のほうに、以前教鞭を執られていた先生が定期演奏会が近くなったりしたときに、アドバイスをしに来てくれたりとかっていう形でしております。また、小学校のほうにおいては部活動のほうが少ないんですけれども、例えば茶道教室、地元のほうでやられている茶道の方の先生に来ていただいたり、あと学校のほうが結局、部活動のほうが生徒の挙手制じゃないですけれども、こういうのをやりたいって多いのに部活をどんどんシフトしていくっていうシステムになってまして。昨年においては「太鼓がやりたい」ということで、日高村のほうで太鼓の団体さんがいらっしやいまして、そういう部活のほうにサポートしてくれたり。全国のコンクールのほうにも出場している団体さんなんですけれども、そういった形で、小学校のほうはそのニーズに応じて地域の方で教えられる人がおったらっていうときに、探したりっていうこともあります。部活動は大体そんな感じかなとは思います。

(杉本コーディネーター)

よろしいでしょうか。

(司会)

はい。

(杉本コーディネーター)

すいません。放課後学習室ですけど、本当に子供たちが一番いい顔をするのは、その子その子一人一人の段階に応じて学習の習熟ができたというか、「分かった」っていうときに一番いい顔をしますので、決してその学力っていうか、そこは前面には出してないんですけど、私の思いは学力はつけてあげたいです。分からないところを一つでも分かってももらいたい。でも、まずテスト期間中は本当に40人とか、学校の半分の人数の生徒さんが来てくださるんですけど、もう徹底して勉強はします、そのときは。終わった後、やっぱりだらーとだらけて、本当にクラブに行っていない子たちが来ていつもの教室に戻るんですが、そこで3年生が入ってくるとまたぐっと締まるので。でも本当に、学校の先生がお互いの子供を学習室につないでくれて、「宿題をさせてください」「この課題をさせてください」っていうところまでなかなか手がつかない生徒さんを預かる場合があるので、その生徒さんたちとはお話をしたり、そのつなげていくまでの場でもあります。本当は、本当に実際は学力がないと生きていく力に直結ということはなかなか遠いなということは感

じます。

(尾崎知事)

その何というか、つないでいく、よくお話を聞いて人間関係作っていく過程って本当に大変だと思いますけど。多分恐らく、貴重な過程でしょうね。子供は多分一生忘れないでしょうね、そのときのことをね。

それ、しかし、さっき中橋先生のお話としてご質問、竹島先生さんのご質問でしたっけね。お一人で大丈夫ですか。大変でしょう。

(杉本コーディネーター)

ばっちりです。すいません。ありがとうございます。私よね。

地域の方たちとか学生さんとか、それから本当に大変なときは先生にもヘルプを頼みます、私のほうから。「先生たくさんいるので上がってきてくれませんか」と。先生もよく学習室の様子は見てくださいますので、私がこちらからアクションを起こすまでもなく、何人かの先生がテスト期間中は上がってきてくれますので。

(尾崎知事)

ちょっと細かいことのように恐縮ですが、その居場所担当と、勉強を教える担当が分かれてたほうがいいでしょうかね。それとも、一人が両方やったほうがいいでしょうか。

(杉本コーディネーター)

ケース・バイ・ケースですけど、その方その方にもよると思うんですけど、その方の手腕というかその方の性格というか。

(尾崎知事)

先生のように、もう本当に習熟されておられると両方できるんでしょうけどね。ええ。

(杉本コーディネーター)

たまたま私は何だか一緒になってるような状況ですけど、どうでしょうね。ちょっとさっきのように複数の方がっていう、数が多くなればそれは必然、当然必要でしょうけども、日高中学校の場合はそんなに困るような人数がいないので、小規模校なので、一人が主軸になって居場所と学習の面の習熟のリーダーがいれば、あとはそれを補う地域住民の方であったり大学生の方であったり、それは十分にそれで回ってはいってます。

(尾崎知事)

ありがとうございます。どうも、貴重なお話をありがとうございます。

(八田委員)

いいですかね。よろしいですかね。

(司会)

八田委員。はい。

(八田委員)

聞き逃したかもしれませんが、ボランティアセンターでボランティアを登録される、その仕組みというか、どういうふうに集めておられるのか、どんなふうにボランティアの方のモチベーションを上げられているか、何か具体的に教えていただけますか。

(長尾主事)

はい。これはボランティアなんですけれども、日高村のほうで年に一回募集をしていたりというところで、形式的には募集はしてるんですけども、実際のところ、一本釣りです。例えば、「活動にちょっと参加してみませんか」というような形で参加していただいてから、定着するっていう方がほとんどやったりとか、ボランティアの方から引っ張ってきてもらうっていう形で年々ボランティアのほうが上がってきているということがあります。

あと、モチベーションというところなんですけれども、依頼のほうはできるだけ広く何回でもいいので活動に参加していただくというところと、やはりちょっと、こちらの発表自体もそうなんですけれども、生涯学習の指定になってまして、やはり子供たちにとってもメリットがある、先生にとってもメリットがある。メリットという言い方はあれかもしれませんが、ただボランティアをする方もやりがいを感じてもらえるような活動でないと、学校支援っていうのが形成できないというふうに考えております。

ですので、コーディネーター始め、学校の先生とまず初め打合せするときには、視点としてはボランティアさんにとってもやりがいを感じられるような活動であるかっていうところを、かなりチェックしてやっております。あとはそれをどういう機会を増やしていくかっていう形に努めているので、それがきっとそのモチベーションに上がっているんじゃないかなっていうふうには感じております。

(八田委員)

学生さんもいらっしゃるということなんですけど、大体年齢層ってどの辺りの方が主に活躍されてるんでしょうか。

(長尾主事)

非常に地理的要因があるかと思うがですけども、高知大学のほうから来てくださって

まして、大体二十歳前後で、特にこの学習室に入ってくれてる方は、教育学部のほうから来てくださってる人がほとんどです。

(八田委員)

ありがとうございました。

(司会)

よろしいでしょうか。はい。

そうしましたら、長尾主事、杉本コーディネーター、どうもありがとうございました。

(司会)

本日は3時半までお時間を頂いておるんですけれども、既に予定の時間が少し過ぎております。この後休憩を取ればと思っておったんですけれども、貴重なお時間でございますので、引き続き協議をさせていただいてよろしいでしょうか。

ありがとうございます。

それでは、これまでの事務局の説明と、城東中学校、日高村教育委員会からの取組報告を踏まえまして、忌憚のないご意見を頂ければと思います。事務局へのご質問ということでも構いませんので、よろしく願いをいたします。

(八田委員)

今日の資料で、一点、幾つか気になったことがあるんですが、資料6の教育振興基本計画推進会議のご意見の中の2枚目の丸の3つ目ですね、「高等学校における対策においてD層への対応のみならず、上を伸ばすことも大事だ」というようなご指摘があつて。実は、今日の資料を見てみると、正にそのとおりの危惧が当たっていてですね。資料4ですかね。資料4の2ページを見ますと、D3、D1、D2、C層、それぞれ推移はしてるんですけど、驚いたのはB層、A層どんどん減っていつているという実態がある。これは非常にまずいなど。もちろんこの本来、大綱の中ではD層をどうしようという議論はしてきたんですけども、そこにずっといついて、B層、A層がいなくなったらこれは大変なことになるので、このご指摘非常にごもつともだなど、今日ちょっと驚いたところです。

それとまた話は違いますが、もう一点ちょっと気になったのは、今城先生のお話にもあつたようにタテ持ちの議論の中で、タテ持ちというのは教科のタテ持ちっていうところに意識が行き過ぎて、教科のタテ持ちがどうも独り歩きするとネガティブになるのではないかな。教科のタテ持ちも、それはチーム学校の中での協働、あるいはOJTを進めていく一部として捉えないと。教科のタテ持ちだけを捉えて見ってしまうと、いやこの教科はタテ持ちじゃないほうがやりやすいよっていうふうに見えてしまうこともあるのかな。だから、ちょっと教科のタテ持ちだけが独り歩きしないように注意しないとイケないなという

気がしました。そう思ったときに、じゃあ、そもそも何でタテ持ちしましょうっていうような、背景というか、何のためにタテ持ちをしましょうっていうことがちゃんと伝わっているのかなど。先生方はまず、その「タテ持ちをしましょう」の前に、教育大綱に沿ってこんなふうに変わっていきましようっていう意識がまずあって、その中の一つでタテ持ちをやってみましようっていうその前提がうまく先生方に伝わっているのかなというのがちょっと危惧されるなという気がしました。

それに関わることとして、資料5のところですけども、資料の3ページの部活動支援員の話で、希望はほとんど増えていないと。学校から是非、部活動支援員を増やしたいという希望は増えていないと。その次の4ページのところでタテ持ちの話をするときに、相変わらず多忙感があって、部活動が終わってからしかできないよというような話書いているので、やろうとしていることがタテ割りになってしまっていて、部活動は部活動で支援員を入れましよう。それとはまた別の次元で教科をタテ持ちにしましようっていうことが、どうも見えてしまっていて、トータルとしてこういうふうにしていきたいから、これをするんだよっていうところがちょっと欠けてるなという感じがちょっと受けました。

以上です。

(田村教育長)

一通り私のほうからもお話しさせていただくと、学力定着把握検査でD層は若干減るのはいいけどっていう話ですけど、それはおっしゃるとおりだと思います。というようなこともあって、やっぱり高校は非常にそもそもの高校に入ったときの学力差が大きいということと、それからそもそも進路も非常に多様であるということと両面を持っていますね。両面あるので、その学力であったりその進路に応じた、ある意味、かなりそれぞれの子供にカスタマイズした指導が必要になるんだらうということ、これまでもいろいろ習熟度別授業とかいうようなことをやってきてますけれども。やっぱり今年、その目玉としてここにも資料にもありますインターネット教材を使ったあれは結局、個々の生徒の学力が高い層は学力高い層で伸ばせるし、低い層は低い層で自分の学力に合った勉強が自学できるというような仕掛けは入れましたんで、他のことも当然やっていかないといけないんですけども、少しこの手段を今年から取り組み始めたばかりですけど、ちょっと力を入れてやっていきたいなと思いますし、そういったことからの成果も出てくるんじゃないかということ期待してるということが一点です。

それから教科のタテ持ちの話で、そもそも前提が分かっているのかとかいうようなお話あって、当然それ前提が分かっていることは必要だと思いますけれども、ただ本当にそれが徹底できているのかというと、そうでない教員もいるのかもしれない。逆に、この教科のタテ持ちということ、要は具体的な取組としてやることで、さっき今城校長さんもおっしゃってましたけども、そういうことをやることによって逆に協働というか、全体で取り組まんといかんよねということが肌感覚として分かっていくというような、逆にそ

のような効果があるんじゃないかなという感じがしてます。

それから、部活の支援員の件については、取り組んだところについては効果があるということで、実は1校当たりの活用回数というのはいいと思ったらどんどん増えてるんですね。どうも食わず嫌いみたいなのところもあって、それは学校というところは外部の人間が入ってくることにいろんな意味の警戒感があったりとか、逆に仕事が増えるんじゃないかとかいうようないろんな心配もあったりしてというところがあって、そこを我々、これまで余りPRできてなかったんじゃないかなというなちょっと反省もしてまして、そこをもっと学校が扱いやすい形にもするし。それから、部活支援員のなってくれる人のプロフィールとかいうようなことをしっかり学校のほうにもお伝えしたり、あるいはお見合い的なこともやったりとか、いろいろそういう工夫を重ねることで、これなら是非使ってみたい、潜在的なニーズはあると思うんですよね。でも、そこが我々十分PRできてない、周知ができてなかったんじゃないかというちょっと反省がありますので、そこはトータルで取り組むということでやっていかないといけないというふうに思います。

(尾崎知事)

私は八田先生のおっしゃるとおりだと思います。すみませんね。私も人ごとみたいに言っちゃ当然いけない。私自身も責任があるんですが、ただ教育委員会の話で執行責任者が彼なので、そういう意味において、この総合教育会議で私もちょっとなかなかご意見も言わせていただかなきゃなりません。これ産業振興推進本部会、フォローアップ委員会とかってなると、私が執行責任者ですから、基本的にもう私が全部お答えをしていく立場になるんですけど、自分が意見を言う立場じゃないのかもしれませんが、ここはちょっと言わせていただくとして。私さっき、八田先生の言われたとおりだと、そのように思います。今、このチーム学校の取組ってというのはやっぱりまだ非常に途上にあって、この2つ、チーム学校で取り組もうとしたのは何なのか。これ2つ大きな理由があって、1つはやっぱり先生方に子供に向き合うという本来の業務により専念していただきたい。そのためにも、お互い助け合っていく、外部のお力もお借りしようではないですかと、そういうことだった、それがまず第一。さらに加えて、もうさっきも申しあげましたけれども、いろんな意味でOJTの働く職場にしなければならんと。二十何歳で先生になったら、この「先生」でいわゆる先輩からも上司からも、どちらかっていうと、一人隔絶した世界になってなかなかOJTが受けられずというのでは駄目なのであって、やっぱり日々の業務を行っていく中において、いろんな人から日々ご指導も受けて成長していくという、そういうような学校組織で是非やってもらいたい。OJTの機能する学校組織であってもらいたい。この2つがやっぱり大きな目的だったんだと思うんです。そういう意味において、このタテ持ちってというのは典型的にそのためのものであって、OJTを機能させるとともにチームワーク良く仕事をしていきましょうということなわけですね。是非、多分まだまだ当面、これ不満が出るのはそれは出るだろうとは思っています。しかしながら、本当の意味でOJT

せていただいたんですけども、その策定の状況、そしてまたこの5ページに書いてありますけども質的な充実、学校経営計画がシンプルなビジョンが必要とか幾つかある教科会の中でもありましたし、非常に網羅的になってはいけない。そして、またその改善・改革ということがきっちり盛られてること、学校自体を良くしていく。先ほども城東中学の校長先生、正しくそういう意識で学校経営に取り組んでおられるということがよく分かったわけですけども、やっぱりそういう学校経営計画がまずしっかりできているかどうかということはこの4月からスタートして、その状況というものをしっかりと検証していく必要があるんじゃないか、まずは。そのことがしっかりプランニングできてれば、それをきっちり実行できていってるかと、そこが全てのスタートではないかというふうに思います。だから、そこがちょっとここに質的な充実及び学校の目標や課題を全職員が、そしてこういうここへ書いてありますように、教員と共有化できてるかということが左側にも必ずしも十分でないというところを書かれてるわけですから、やはりそこをしっかりと検証していく必要があるんじゃないかということが一点。

それからもう一点は、この対策という意味で要因系、つまり300小中ある中で、どういう地区なりどういう問題点がある学校なり地域があると、そういうことに対してタイムリーに手が打てるかどうかというところ。全体で全県で何校できましたというその平均ではなくて、やっぱり課題のあるところに的確に手が打てるかどうかということが大事なことだと思います。そういった意味では、要因とそこに対策とこういうところとの関係というところが各市町村教委との関係とか、いろんなことがあるかと思えますけども、そういうところがもう少し何かやっぱり学力の向上にしても課題があるところ。いろんな問題に対して、課題に対してきちっと対策が打てるか、重点指向でやられてるか、そういったところが何か検証できるようになればいいかなというふうに思いました。

以上です。

(田村教育長)

学校経営計画のことでお話し合い、資料としてはこちらの参考資料のほうにも入ってるわけですけども、こちらの詳しい資料っていうか、重点的な取り上げっていうことにはなってないですが。ただ、学校経営計画そのものは随分充実してきたというか、3年計画で立てましょうということで昨年度から取り組んできて、かつ策定過程においても学校経営アドバイザーが学校も訪問もして経営計画をまた見させていただいてチェックもするとか、あるいは半年たった時点でまたその進捗状況についても個別にチェックをするだとかいうような形で、かなりそこはやれてきてるんじゃないのかなというふうに思ってます。ただある意味、管理職、校長、教頭レベルで言えば、そういう形で学校経営計画を立てて実行していくという意識がかなり定着してきたんじゃないかなと思うんですが。それが一般の教員までしっかり意識が徹底できてるかという辺りが、これからの課題なんじゃないかなというふうに思ってます、そこは、それは結局そのような成果に出てくるというこ

とだと思ふんで、そこをこれからなお力を入れていかないといけないところじゃないかなというふうに思ってます。それから、問題点といいますか、それぞれの学校の特性というか、そういったものに応じての取組っていうこと、それはおっしゃるとおりだと思いますが、それは一つには、それぞれの学校においてテーマを持って取り組んでいただくときに指定校的な取組をやるということが一つ施策としてはあるんだろうと思ふんですが。あとはそれぞれの正に学校経営計画の中で、自分ところの学校の課題洗い出しをしてもらって、じゃあそれにどうしてしっかり取り組んでいくんだということを、先ほど言った指導主事であったり、アドバイザーも一緒になって考えさせていただいて、そこにしっかり手を足していくということではないかなというふうに思ってますが。あと何か、プラスのことがあれば。

(平田委員)

失礼します。その学校経営計画につきましては、今おっしゃっていただいたように全ての学校のほうから、これを計画したものをうちのほうに上げてきていただいております。特に事務所を回って上げてくる場合については、事務所の点検を目を入れて上げてきてもらっております。これについては、学校経営アドバイザーが全ての学校を回って、話を校長さん教頭さんとじかにやって、この問題をこの方法で解決できますかというようなところを学校と一緒に話し合ってきているところです。これについては年間3回中間検証、そして最終の検証というようなところで実際は行ってきているところですけども。課題が実際にまだ解決していない学校が当然ある。そこについては、どのようなところが問題であるのかということをもたまた話し合いをしながら実際に行っている。課題がやはり大きいなどといったようなところにつきましては、我々本課のほうからもアドバイザーと一緒に学校を訪問しているといったような状況がございます。ただ、おっしゃっていただいたように全体的に言うと、やはり課題がなかなか解決しないなどといったところは、教員全体の共有が十分でないといったようなところもありますので、そこについてはやはり引き続き我々も入って指導も行っているといったような状況がございます。

(竹島委員)

すいません。このD3、D1、D2の件なんですけれども。私も2ページので、1の部分で就職試験に必要な最低限のラインはクリアしているが、仕事をする上で支障が出ることが多いと。これは何を基準にこういうコメントになっているのかっていうのと、この情報がどこまで公表されているかという。私もこの委員をして、私今回初めて見るようなデータだと思ふんですけれども、やっぱりこれ見たときにすごい数値的にびっくりしましたし。やっぱりでも、もとをただせばやっぱり中学校の教育が大事だと思うし、またその前に小学校というのがあると思ふんですけれども。ちょっと一緒に重なりますけど、また部活動の話に戻って、やっぱり教員の多忙感とかが常に言われてるんですけれども。

ちょっとこら辺の。やっぱり中学校ってというのは、そんなに先生忙しいんでしょうか。

(田村教育長)

この間、高知県もある意味同じなんですけど、福井へ高知県から派遣している教員も、報告会みたいなものを作ってもらいました。聞くと、やっぱりほとんどの場合は、夜の10時近くまで残っているいろんなことをやられてると。教科会やったりとか授業の研究やったりだとかいうようなことをやられてる。その話を聞いたときに、じゃあ高知県はどうなんだという、状況的には似たようなこともありますということです。徒労感ということをやテ持ちのところで出てますけど、私としてはこれやテ持ちだから大変になるというわけでもなくて、やっぱり授業をしっかり改善していこうだとかいうようなことを今の状況でやろうとすると、やっぱりどうしても一定多忙になるんだろうなというふうに思います。そのためにも、資料にも書いてるようないろんな外部の力を借りるだとか、それから、部活動の見直しもしていかだとかいうようなことが必要だと思ってます。特に、部活動負担が非常に大きいということは福井の方からも聞きますし、高知県でもよく聞きますので、これはせめて週に1回あるいは2回は休みをとるだとか、部活動の時間を一定6時あるいは6時半にはもう終わるんだとかいう、そういうようなことをもっと徹底していく必要があるんじゃないかなというふうなことを、今ちょっと話もさせていただいてると。まだ、現場と今そういったことは話をさせていただいたと。そういうことかなと思ってますけれど。とにかく、忙しいのは間違いなく忙しいです。

(竹島委員)

あと、このD3の情報ですよ。

(事務局)

はい。高等学校課でございます。

本日の高知県教育大綱の概要で、例えば3ページを見ていただいて、知・徳・体の基本目標。その3ページのところの知・徳・体の知の部分なんですけど。知の部分の高等学校のところの基本目標に掲げて進めるようにしております。そこに、高校3年生の4月の学力定着把握検査におけるD3層の生徒の割合を15%以下に引き下げるというような形で、知の中の最初の目標として、大きな数値目標として掲げて取り組むようにしております。それで、教育基本計画におきましても、今日ちょっと準備してはいないんですけども、6ページのほうでS・A・B・C・Dゾーンの説明もしながら、各学校にも説明をして各学校ごとに取り組を進めてるというような状況で。本日のこの資料4のほうの資料でいきますと、竹島先生がおっしゃっていただいた、ちょっと表現の仕方が変わっておりますが、こういった経年変化で示したのは今回が初めてなんですけれども、それぞれで示してあるのはこれまでもずっと示してきてるというような状況になっております。

(竹島委員)

示されてました。D3 とかってありますね。

(事務局)

それで、D3 層がどういうことかというのは、これはベネッセですかね、会社のほうでのレベルはこういうレベルということで示されている。

(竹島委員)

はい、分かりました。

(中橋委員)

またタテ持ちの話に戻るんですけども。今日の資料6で、計画推進会議の主な意見の1ページ目の上から4つ目で、発達障害の支援には学年団が重要になってくるが、うんぬんかんぬん、「授業をしてないから分からない」といった弊害も出てくるということで、タテ持ちの弊害というものが具体的に言われているんですが。ちょっと、ここの書かれてあることの意味が分からなくて、どういう趣旨なのかちょっと聞きたいんですが。私なりに解釈すると、やはりこれ八田委員も言われていたように、教科のタテ持ちということがすごく強調されて教員に伝わってるのかどうなのか。そこからこんな弊害というような話が出てきてるのかなというようにちょっと勘ぐっているんですけども。ちょっと教科のタテ持ちということ。教科というところが強調され過ぎて、もし弊害というような話が出ているのであれば、そうじゃない本来の目的というところをもう少し広報というんですか、みんなに知らしめる活動が必要なんではないかなと思うんですけど、その辺りはどうなんでしょうか。

(田村教育長)

タテ持ちということ。要は、学校においてはタテの関係とヨコの学年団の関係と両方あって。タテ持ちを余りに強調し過ぎると、ヨコの学年団のつながりというか、ヨコを見ることがおろそかになるんじゃないかというご趣旨ではなかったかなというふうに思います。ただこれは、結局タテだけでいいわけではなくて当然ヨコもやっていかないと。相反する話ではないと思うんですよね。ただし、時間的にヨコでの連携をとる時間が少しとりにくくなるだとかいうような、あるいは機会として同じ学年の、自分の属する学年の生徒を、一通り見るようなことが少し機会が少なくなるだとかいうようなそういう一定の制約はあると思うんで、そこをいかに補っていくかということじゃないかなというふうに思います。弊害というよりは、そういう課題。一定の制約ができるんで、そこをしっかりとっていか

ないといけないということなんじゃないかなというふうに思ったんですけど。

(尾崎知事)

一言でいくとタテ持ちやったら学年見渡せなくなるなんてことになるわけないので、それはちゃんと両方見ましょうという、それは折り合いをつけるということでそれは大人なんですから、仕事をして。ある方面の仕事を始めたらこっちが一切できなくなりますなんてことにはならない。およそいろんなことを同時並行的に処理していくっていうのが、それが大人の仕事というものなんだろうと思うんですね。けどただ、ここで言ってるところにすごく注意をしないといけないなと思うんですけど、やっぱり特別の配慮を必要とするお子さんたちがいたりして、こういうところに対してもう一段きめの細かい対応が薄くなってしまうようなことであっては確かにいけない。けど、多分そういう特別の対応を要するお子さんたちに対する対応についても1人の先生だけで抱えて見てるんじゃなくて、チーム学校として力量のある先生がしっかりそこをバックアップしていくとか、そういう仕組みっていうのが必要なんではないのかと。ある意味、ごめんなさい、タテ持ちっていうのはどっちにしろ教科に該当する話なんで、タテ持ちの話をするときは教科の話だけになると思うんですよ、これは。ですから多分、八田先生のご趣旨もタテ持ちが教科のタテ持ちだけ強調されてるって言われてる。チーム学校が教科だけに強調されてるっていうご趣旨でございますよね。ですから、その他の点についても、例えばこういう特別な配慮を要するお子さん方に対する支援についてもチームワーク良く仕事をしていきましょう。そういう意味でのチーム学校。多様な分野においてチーム学校の機能が発揮できるようにしていかなければならんということなのだろうと思うんですね。そういう意味においてはちょっとまだ教科のタテ持ち、いわゆる教科のチーム学校イコールタテ持ちはスタートした。しかしながら、じゃあ例えば先生方の多忙感解消も含めた、さらに効果をもたらすという意味においても、例えば部活なんかについて外部のお力をお借りするという観点でのチーム学校というのはどうだろうか。これはまだまだ途中だろうとか。それからやっぱりこの発達障害のお子さんに対する支援について不安を感じるという中において、教科面でのチーム学校はスタートしたけれども、こういう面におけるチーム学校っていうのはまだまだスタートできていないんじゃないだろうとか。ちょっとまだまだスタート始めた段階において、若干部分的にまだスタートしているところがあって、全体としての整合っていうのはとれてないっていうところがあるんだろうなというところは、ちょっと否めない状況なのかなと。私も全体見てて思います。さっき久松委員が言われましたように、最終的にそこを学校の中でコーディネートしていくっていうのが校長の役目で、学校経営計画そのものは100%作り始めてますので。今回の資料に載ってませんが。ただ、この中身そのものがいわゆる学校経営計画の中身が充実したものとなってるかどうかの表しているこの資料になってるんだと思うんですね。まだ、ちょっとそういう意味において、全体としての整合性の確保というか、バランスよく全体が進んでいるかというところ

まだいびつになってるところがあって、そのところは大きいに自覚をしてここから先の執行に当たる。また PDCA サイクル回し。我々もそういうところに注意をして PDCA サイクルを回していくということに留意しなければならんのではないのかなと、そのように思っています。多分もう一段それから現場の皆さんのご意見をお聞きすると、このところはもうちょっと緩めてもらったほうがうまくいくとか、このところはもっと厳しくていいんじゃないかとかいろいろご意見があるんだろうと思いますので、教育委員会事務局のほうも今学校と盛んにやり取りしてると思いますから、そういうところの現場の皆さんのお声を更に聞いて次に反映できていけるようにできればいいかなと、そういうふうに思いますけれどもね。次いつやるんでしたっけ。11月。11月ぐらいの段階でもう1段そういうところも皆さんの声なんかも是非聞かせていただいて、さらにさっき言ったような全体として教科のチーム学校だけじゃなくてその他のチーム学校の部分っていうのも大きいに進むというふうには是非持ってっていただきたいものだなと私も思いますね。はい。

(平田委員)

私も今回初めてこの会へ出させていただきまして、去年本当にこの高知県の教育についての現状と課題で、ご議論なさってすごいいい大綱ができてると感じるしております。そこで私この進捗状況の資料の1ページでございますけど、ここが私の気持ちとしては学校支援地域本部の設置という項目でございますけど、これは大変重視していただきたいというふうに思っております。この本部は学校、家庭、地域が一体となって地域ぐるみでの子供を育てる体制づくりを大きな目的としておると思います。現状では家庭だとか地域の教育力が弱くなったと、こういうふうに言われておりますけど、この本部を設置して、本県の新しい教育風土づくりをしていただきたいと。ひいては高知県は教育の県と言われることが知事さんも含めてこの総合教育会議を持ってる大きな趣旨ではないかというふうに思っております。是非、県教委を中心として市町村教委と連携をして、できるだけ早く実施校を100%にさせていただいて高知県地域全てが大変教育力の高い地域へ持って行ってほしいというふうに思っております。それ私の意見です。やはりここが教育風土づくりっていうのが大変大事やないかなと思います。

次にちょっと私簡単でございますけど5ページ、中身をあんまり知らなくて日高のほうでもちょっと活用事業で載ってございましたけど。5ページすいません。度々、高等学校の学力定着把握検査の結果のお話が出ておりますけど。ちょっと私は違う質問なんですけど、3年生の1回目、4月の実施でD3がぐんと増えてますよね。倍ぐらいに。2年の9月から。この2年生の9月から3年生の4月の間にかけて、事務局としてはどんな分析をしているのかということですね。学力っていうのは一定方向で伸びていてもらいたいし、その分析をすることによって、目的とする15%以下に目の前に見えてるところが戻ってくるというところを分析をして、いわゆる学力向上対策に当たっていただきたいという気持ちをすごく持ちました。

それと7ページでございますけど、至るところへちょっと出ておりますけど、7ページの真ん中の取り組み状況の(2)でございますけど、生活困窮者自立支援事業学習支援というのがございます。ここが高知県の本当の大きい課題だと私は思っています。就学支援率も全国でトップクラスに高知県は支援が必要だと思っております。ここの内容はちょっとよく分からないんですけど、いわゆる予算上のたてりなのか、特別にピックアップして支援をしているのか、どういう状況か分かりませんが、学習支援を要する子供さんには手当を厚くしてやるということが高知県の教育のレベルアップにつながっていくことだというふうに思っております。質問にはなっておりませんが、その辺をちょっと気になる所ですので、また事務局としてもご対応をお願いしたいというふうに思っております。

以上でございます。

(田村教育長)

はい。学校支援地域本部の件についてはもう我々としても同じ気持ちです。以前からいうと、急激に増えてきているのは事実なんですけれども、おっしゃるように全然まだ足りないと思っておりますので、これから増やす努力をしていきたいというふうに思っています。

それから、3年になるとD3層が増えてくるという原因ですけれども、これ英数についてはそんなに悪化するということではないんですが、一番大きな要因は数学です。数学が非常に悪くなると。その数学が悪くなる原因は、高3になると高2までのこのテストの中身としてはかなり中学校レベルの内容が随分含まれてます。という中で、中学校レベルの問題についてはかなり2年までに解けるようになってくるということなんですけど、高3になると数Iの問題がウエートが非常に高くなっていくというときに高校で学べる数Iの力がついてないというところで大きくここで悪化していくということのようです。要するに数学の力に問題があるということなので、それを多分進路によって数Iをもう、例えば就職するんであれば必要ないんじゃないかとか、いうようにある意味捨ててしまうような生徒が随分いるんじゃないかなという気がしています。ただ、我々としては数Iを全てマスターするっていうところまでは現実問題としてなかなか難しいかもしれませんが、それぞれの生徒にとって必要な数Iの内容が当然あると思いますので、そのところは最低しっかりつけていくとかいうようなことを、それぞれの生徒にそれぞれカスタマイズしたような指導をする中で、そこを何とか対応できないのかなというふうに考えてるところです。

それから、生活困窮者の授業については、これは地域福祉部の事業なんですけれども、放課後学習支援ということでは同じですが、生活保護を受給している世帯の子供だとか、基本的にそういった生活、経済的に厳しい家庭の子供をターゲットとして放課後の学習、あるいは長期休業中の学習支援を行う。そういったことをやっておる事業ということなんです。

(司会)

時間が超過はしておりますが、よろしいでしょうか。ありがとうございます。今日も司

会の不手際で時間が超過して恐縮でございます。それでは、意見交換はこちらで終了させていただきます。と思います。

次回の日程でございます。第2回の会議は、28年度本年度の取組の進捗状況と併せて、平成29年度の取組の方向性についてご議論をいただければと思っております。11月14日の月曜日を予定しておりますが、詳細は追ってご相談をさせていただきます。

それでは、以上をもちまして、平成28年度第1回高知県総合教育会議を閉会いたします。皆様どうもありがとうございました。